

旅人なる赤龍帝の兄

アザトク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは兵藤一誠に兄が居たらという、もしかしたらのお話である。

※『にじふあん』で掲載していました作品をリメイクして再開しました。

目次

第一話・旅立ち、出会い、再開	1
第二話 冥界出発前	6
第三話・冥界到着	10
グシヤラボラス家	14
都心の冥界	17
ライザー・フェニックス	20
オーフィス	25
パーティーの裏側で	29
帰宅	32
閑話・旅館	38
事務職員	52
オークション	56
新しい家族	68
紫藤イリナ	72
キーン×読書×過保護	76

第一話・旅立ち、出会い、再開

ちやつす、俺の名前は兵藤 旅人（ひょうどう たびうど）っす。
俺は今から旅に出る為に家を出ようとしている。

「本当に行くのか？」

「ああ、親父すまねえな。こればかりは俺の決めた道だ、貫き通すぜ」

見送るために家の前まで来てくれたのは親父に御袋に一誠だった。

「寂しくなるねえ、元気でやりなよ」

「当然だ、御袋も元気でいてくれよ」

「兄貴・・・」

「一誠も自分が好きなもんにはどんなものであれ本気でいけよ」

「もちろんだ、夢を諦めねえ」

良い返事だ、俺はニカツと笑い背を向ける。

「あばよ！ またいつか帰ってくるぜ!!」

こうして俺は家を飛び出した。

それから時は経ち

なにもない空間、そこには一人の少年と赤くてデカイ竜が居た。
少年の体はいたるところから血を流しており、満身創痍の状態
一方で赤い竜も強固な鱗で守られた体のいたるところから血を流
して満身創痍

「小さき者よ、このような楽しき戦いは久しぶりであったぞ」

赤い竜は自身をここまで痛めつけた人間に対して心からの敬意を送った。

「はっ、そうかい。こつちも久しぶりだったぜここまでの戦いは……
それと俺の名は兵藤旅人だ。覚えとけ」

「ふむ、良い名だ。その名前、覚えておこう」

実に一週間、この『次元の狭間』と呼ばれる場所で戦った両雄の間には種族を超えた絆のようなものが生まれていた。

「今から次元の裂け目を開く、そこから元の世界に帰れ」

「恩に着る」

ボロボロになりながら裂け目へと向かう旅人

「あばよ宿敵（親友）、次こそは決着をつける」

「ああ、去らばだ宿敵（親友）、次に出会うまで生きていろよ」

「テメエもな」

背を向けながら手を振り、旅人は裂け目へと姿を消した。

なにやら目玉が沢山の空間を抜けると、そこはどこかの学校の屋上だった。

「ここは………駒王学園？」

ははは、最高な場所に送ってくれたようだなグレートレッド

久しぶりに一誠に会いに行くか、親父とお袋も元気にしてるかな？

俺はお土産のことを考えながら帰ろうとすると、学園全体に結界が張られていることに気が付いた。

結界とか、北欧であの爺さんの部下だつていう美人な女性ばかりの戦闘部隊以来じゃないか。

で、そんな結界がなんでこんなところで？

そう思つて俺は轟音がしている校庭を見下ろしてみると赤い鎧と白い鎧を着ている二人が戦っていた。

見たところ決闘みたいだし手は出さなくても良いか。

それにしても――

「あの二人、遅いな」

レベルが低いつてわけじゃないが、動きが遅い

あれぐらいの速さだったら、北欧の爺さんと闘ったら即殺されるぜ？

考えたらあの爺さん、何者だつたんだろうか？

キャバクラで出会つて、そのあと酒を飲んでたら、美人さん達に『今度はお前が連れ出したのか！』とか言われて、なんとか逃げ切ったんだが………

「いかにいかに、若干トラウマものになつてる」

危ない、本当に怖かつたぜあいつらは。

それと、下の赤い方

なんか凄い『部長のおっぱいがあああ!』とか『子猫ちゃんのおっぱい』とか叫んで白い方を殴っている。

白い方は白い方で『我、目覚めるは、覇の理に——』とか言ってるし

あれか? これってなんか最終決戦みたいな感じなのか?

白い方が良い感じのオーラを出し始めると、突然、サルが現れた。どうやら白い方を迎えに来たらしい。

はあ、なんだよ、最終決戦じゃないのかよ。

若干、がっかりして俺が空を見上げると変な男がドデカい光の球を作っていた。

「はあはあはあ、ヴァーリめ、よくも同胞を」

ふむふむ、なにやら面倒くさそうなやつっぽい俺が倒すか。

俺はその男の目の前まで跳躍し、踵落しを食らわせてやった。

私達はイツセーとヴァーリの戦いが終わって、アザゼルと一緒にイツセーの傍までやって来た

すると——

ドツゴオオオオオオオオオオオン!

私達とヴァーリの間になにかが落ちてきた。

「な、なんだ、一体!？」

「くっ、敵の援軍か!？」

上がイツセー、下がヴァーリ、どうやら向こうも予期していない事態だったみたいね。

「イイイイイイイイヤツホオオオオオオオオオオオオオオオオイ!!」

それに続いて、なにかが着地してきた。

着地した場所は地面が盛り上がり、土煙が舞う

私達は構える。

土煙が張れていくと血を流しボロボロになった、誰かに面影が似ている一人の少年が現れた。

「ケホケホ、いや〜、考えなしに跳んだけど、案外屋上から飛び下りても無事だったな」

ケラケラと笑う男

誰、一体!!

「……あ、あああ」

イツセーが震えながら男を指さす

敵も味方もそんなイツセーに注目している。

「あああ、兄貴!?!」

『え?』

一瞬の静寂、そして

『兄貴いいいいいいいいいい!!?』

え? この人が噂のあの人!?

「うお!!? え、なに?」

大声にビツクリした男がこちらを向く

「おお、なんだ一誠じゃないか、赤い鎧ってお前だったのか」

「なんだじゃないよ、なんでここにいるのさ!?!」

そう言うと、イツセーのお兄様は少し悩んで

「ちよつと竜と闘ったらここに送られた」

『はい?』

竜? それってドラゴンのこと?

「いや〜、強かったなアイツ」

ははは、と笑うイツセーのお兄様

「貴様、何者だ?」

「ん、なんだ白いの?」

ヴァーリが警戒心バリバリで聞く

「俺か? 俺の名は兵藤旅人、しがない旅人さ」

「そうか、では目障りだ、死ね」

てつきり撤退するものだと思っていたヴァーリーがイツセーのお兄様に攻撃を仕掛ける。

私達は突然のことに反応できなかった。

『Divide!』

しかも力も半減されてしまった。

敵味方関係なくこの場に居る全員がイツセーのお兄様の死を覚悟したわ。

でも――

「遅いんだよ、雑魚が」

手首を返すだけの裏拳、それが突撃してきたヴァーリに当たり

それだけで『禁手』した白龍皇のヴァーリが吹き飛び、校舎を突き破っていった。

ヴァーリは校舎の向こう側で仰向けに倒れ痙攣している。

「その猿、あいつの仲間だろう？ 連れて帰れや」

「は、はいー！」

そう言つて、イツセーのお兄様は背伸びをして

「じゃあ俺、先に家に帰つてるから」

「え、ちよつと待つてくれよ兄貴！」

「じゃくなく、お土産は期待するなよ」

手を振りながら帰ってしまった。

あれ？

第二話 冥界出発前

家に帰り、親父とお袋との久々の再開で泣きながら抱きつかれたりした。

俺は旅先での話をしてやったり、逆に最近の話をしてもらった。なんでも俺達の家にもホームステイしに来ている奴が何人か居て、家族同然に過ごしているとか。

家族か……楽しみだ。

「ただいま〜」

「おう、お帰り」

ようやく帰って来た一誠

その後ろにはさつき見かけた紅髪の美女と金髪の少女がいた。

「しばらく見ないうちに両手に華を作っているとは……我が弟ながら恐ろしいな」

「いきなり何言ってるんだよ?」

なんか一誠が遠くに感じるよ。

「あ、どうも初めまして、イツセイさんのお兄さんですよね!」

金髪の娘が丁寧に頭を下げてくる。

「ああ、これは挨拶が遅れてごめんね。俺は兵藤旅人、その一誠の兄貴だ、好きに呼んでくれ」

「私はアーシアって言います!」

「私の名はリアス・グレモリーと言いますわ、気軽にリアスと呼んでください」

互いに握手する俺とリアス

「ははは、リアス。俺はお前と同じ年だから敬語なんて使わなくて良いよ、アーシアちゃんもここに住んでるなら俺に敬語を使わなくても良いよ」

「そう?　じゃあそうするわ」

「私はいつもこの喋り方なんで気にしないで下さい」

ふう、なんとか壁を作らずに話せてるな。

「兄貴、戻ってきてるなら連絡してくれよ」

「ははは、スマンスマン。サプライズで驚かしたかったんだ」

本当はまともなお土産が無かったから期待されても困るだけだったからなんだけどね。

まあ、とにかく

「みんな、元気そうだなによりだ」

心配してたところも幾つかあったが安心したぜ

それから数日、夏休みに入り、朱野とゼノヴィアというこれまた美人が居候しにきた。

その際に朱乃が一誠に抱きついてリアスとアーシアが色々抗議していたのを見て一誠ハーレムのメンバーが増えたのを確認した……弟よ、ちよいと男同士、拳で語り合おうか。冗談はさておき、俺は夏休み明けから駆王学園に清掃員として働くことを考えている。なにやら俺の感があの学園は楽しそうなのが起きそうだと言っているからだ。

だが、そんなことよりも重要なことがある

「……………家、デカくなりすぎじゃね?」

昨日、近所の皆様方はどこかもっと良い土地が見つかったからと言つて一気に引越してしまい

朝、起きたら我が家がこうなっていた。

『な、なんじゃこりゃああああああ!!?』

一誠の叫び声が聴こえてきた

うん、叫びたくなる気持ちわかるよ

朝食時、親父とお袋はなぜか一日でリフォームできたことに疑問を持つていなかった

俺もなんとなく二人に合わせておく。

ふむ……今回の現象、人間の力以外が関わってるな。

それこそ魔法や超能力とかが

前に旅先でそういう類の力を操る奴らにあったが、そいつらも普通の人間にはできないことを平然とやってのけてたな。

朝食が終わって一誠の部屋で皆が集まってなにやら話している間、

暇なので俺はのんびりとTVを見ている。

そして話が終わったらしく、みんなが戻ってきた。

各自思い思いのことをしている中、座布団の上で胡坐で座る俺の膝の上に子猫が乗ってきた。

俺の妹分第一号である子猫は俺が居る時はここが定位置になっている。

なんか知らんが懐かれた。

もちろん恋人的な意味ではなく、甘えられる兄貴分としてだが。

ちなみに妹分第二号がアーシアで第三号がゼノヴィア

唯一の弟分が木場

みんな俺のことを兄と呼んでくれる。

…………なぜだ？

リアスと朱乃は兄とは呼ばないが、家族として接してくれる。

だけでも俺は勘付いている、こいつら俺や親父達に言えない隠し事をしてしていると

それが犯罪やドラッグでなければ良いんだが、そうだったらどうしようと思ってもいる。

とりあえず俺の胸に寄りかかっている子猫の頭を撫でておく。

ゴロゴロと気持ちよさそうに喉を鳴らす子猫

うんうん、可愛いな

「なんか子猫ちゃんは兄貴に随分となついているよな」

「人が良い気分になってるんですから黙っていてください」

一誠には厳しい子猫である

「こら、そんなに冷たくすることないだろうが」

「…………すみませんでした」

そう言いながら俺の腕の中で丸まり、寝息を立て始める子猫
寝るのかよ、完全に逃げたな。

「あ、そうだ父さんと母さん、それに兄貴」

「なんだい、イツセー？」

「俺達、夏休みの間さ、部長の故郷に行くから」

リアスの故郷…………確か外国だって話だが、本当かどうか。

案外、こいつら悪魔とかの類で冥界とかじゃないよな？
な訳がないか！

グレートレッドの野郎が居たからって考えすぎだよな。
俺ってばなにを言ってるんだか、ドラゴンは数匹合ってるけども悪魔は見たことないし

そんなやつが家に関わるだなんて……この家のリフォームのことがあったや。

いやいやいや、忘れようこのことは

「俺も行きたいな」

「駄目」

「どげなして？」

「なんとなく」

「よろしい、ならば戦争だ」

「ちよ、兄貴の拳骨は軽く死ぬるからね？ 喧嘩なんてする気は…

ギャアアアアアアアアアア!!」

一誠をボコリスツキリしたことだし

「じゃあ、俺は行かないからお土産よろしくな」

「……………」

「返事がない、ただのサンドバックのようだ」

「違うから！ 死んでないし、サンドバックでもないからね!？」

ふう、やっと起きたか。

とにかく、俺はソファに座り、膝上に子猫を置いてまた考え始めるのだった。

下手したら、俺の予想以上に兵藤家の周囲の状況は裏側で大きく変動しているのかもしれない。

第三話・冥界到着

一誠達がリアスの故郷に行く五日前
俺は家を探索していた。

五階には俺の部屋があり四階は誰も使っていない。

だから何もなければずなのだがアザゼルをこの階で良く見かける

アザゼルは教師なのになんで家に来ているか不思議だが本人曰く

『オカルト部の活動だから』らしい

まあ、顧問なんだし見に来るのは当たり前か

あと、アザゼルとはよく話が合うので仲はかなり良い

「しかしまあ、見事に何も無いな」

全ての部屋を探ってみたがなんにも無かった。

肩を落として最後の部屋を出ようとした時、ドアの近くに六茫星が

書いてあるシールを見つけた

気になり手に取るといきなりシールが光出した

「うお！ なんだよ一体!？」

部屋を満たす光

光が収まり目を開くと森だった

「……………冒険の匂いがするぜ」

どうしてこうなったかは分からないが冒険の匂いがしたならやる

ことは一つ

俺は足下に落ちていた木の枝を拾って地面に立てる

手を離すと俺の方に倒れた

「よし、向こうだな」

さあ、冒険の始まりだ!!

その頃、人間界――

「どうしたんだよ子猫ちゃん?」

俺の部屋に集合したオカルト部の面々

その中で子猫ちゃんがずっとモジモジしていた

「いえ、座り心地が悪いというかなんというか」

「あ、わかります。なんか落ち着かないんですよね」

子猫ちゃんの言葉に同意するアーシア

「あれじゃないかな、いつも兄さんの膝の上に座ってるから」

なるほどゼノヴィアの言う通りだ

子猫ちゃんとアーシアとゼノヴィアは——特に子猫ちゃんは——

——よく兄貴の膝の上に座る

「あそこの座り心地は凄いですよね」

「尋常じゃなく落ち着く」

「なぜか知らないけどな」

兄貴の妹分達から好評の兄貴の膝

なんか兄貴が羨ましいぜ

「ねえ、イツセー」

「なんすか部長？」

「ずっと気になってたんだけどイツセーのお兄様って何者？」

「あ、私もそれは気になってましたわ」

「色々噂は聞いてるんだけどね」

気がつけばこの部屋にいる全員の視線が俺に集まっていた

「うくん、そうだな……」

兄貴が何者って言われても俺の兄貴でしかないんだけども

「一言で言うなら旅人だな」

うん、これしかない

「旅人ねえ……私が聞いた噂からイメージすると英雄とかなんだけど」

「私が聞いた噂から想像するに霸王ですわね」

「僕が聞いた噂では修羅なんだけど」

上から部長、朱乃さん、木場

ああ、そのイメージもわかる気がしなくもない

「多分、それは兄貴がヤンチャしまくってた時期の話ですよ」

「え？ お兄さんがヤンチャな時期ですか？」

「うん、大々三年ぐらい前の話かな——」

兄貴は自由が好きな男でやりたいと思ったことはなんでもかんでもやってた。

で、兄貴は喧嘩が半端なく強くてここら辺一带の不良が束になっても敵わないぐらいだからだった

とある日、兄貴が夜の街を徘徊してたら誘拐されちゃって奴隷扱いされたらしい

それから二ヶ月後、奴隷仲間と反乱を成功させて新しい国を作りあげたんだ

『……………』

俺が話終わると沈黙が場を支配した。

「ツツコミ所が多すぎるわ」

「分かってますよ部長、でも全部事実だし、まだまだ他にも武勇伝は山ほどありますよ?」

そーいや今朝から兄貴の姿を見てないけどなにしてるのかな?

「なるほど、事情は把握した」

俺は枝に全てを任せした後、なんとか人里に辿り着くことができた

家や建物関係は全て木造、村長の話によるとこの世界で田舎の方らしい

村人は畑仕事なので採れた物売って生計を建てているらしい。

一宿一飯の恩で俺は畑仕事を手伝っていたのだが仕事の途中で偉そうなやつらがやって来た

なんでもここら辺を仕切っている奴らで圧政をしており、子の村も被害にあっているらしい

「貴方達には一宿一飯の恩がある、暴力的になるが任せてくれ」

「御待ちなされ旅人殿、一体なにをする気じゃ?」

「ここら辺を仕切ってるとかいう奴——グラシヤラボラス家をぶつ潰す」

俺がそう言うと村長や他の村人達が制止の声を掛けて来る

「お止めなされ、一宿一飯の恩なら十分に返していただいた」

「そうだぜ！ あんたが気にすることじゃないよ!!」

だが俺は無視をして村長の家を出て行こうとする

「待って!!」

目の前に両手を上げて立ち塞がる少女

名前はニーナ、俺を家に泊めてくれた家族の次女だ

「行かないでよ、行ったら旅人が死んじゃうよ!!」

泣きながら俺に訴えかけるニーナ

その頭に手を乗せて、横を通り過ぎて行く俺

「……………決意は固いようだね」

扉を出たところで話しかけてきたのは、村長の家の壁に寄りかかって行ったニーナの姉であるアイラ

アイラはこの村で唯一、機械やバイク系統を扱う仕事をしている。

「私の改造したモンスターバイクがあるからそれで行きな」

「止めないのか?」

「三日ほどアンタと一緒に暮らせば止めても無駄なことぐらい分かってるさ、なら私があんたの旅立ちを邪魔するわけにはいかないよ」

「……………そうか」

ふふふ、アイラには敵わんな。

「本当に佳い女だよ、お前は」

「ははは、ありがとうね。——じゃあ、行ってらっしゃい。生きなよ」

「ああ、行ってきます。またいつか会おうな」

拳と拳を合わせて俺はバイクに跨り出発する。

去って行く、旅人の背中を眺めながらアイラは呟いた

「本当、馬鹿な人」

その頬には一筋の涙が流れていた。

目指すはグラシヤラボラス家だ。

グシヤラボラス家

バイクを百キロぐらいの速度で走らせること約二時間、ようやく城が見えてきた。

「うん？ なんだあの集団は？」

目の前にはボロボロの姿になって、集まっている武装をした兵士達
バイクから降りて俺はその集団に近づくと

「誰だお前は!!」

その先頭に立っているリーダーらしき男が俺に向かって叫んでくる。

「俺か？ 俺の名は兵藤旅人、ちよいとグシヤラボラス家に殴り込みに行く途中だ」

「お前が？ 一人でか？」

「そうだが？」

一瞬の静寂、そして目の前の少年は口を開けた。

「お前も親父の様にバカなことを言うのだな」

「話から察するにお前の親父も殴り込みに行ったのか？」

「いいや、親父はグシヤラボラス家の血筋だよ。今の当主が無能で民たちに圧政をしているのは知ってるよな？」

「ああ、だから俺が来たんだ」

「その圧政のことを咎めたら俺らはやつらに殺されかけた。命かながら俺達は逃げてきたんだが親父は残って今も戦ってるんだ。本当、馬鹿だよ親父は」

「そうかい、なら俺もいくか。」

「おい、お前なにしてんだよ!?!」

「あ？ だから殴り込みに行くんだって」

馬鹿かコイツ、自分から聞いておいて俺の話聞いてなかったのかよ。

「無茶だ、お前死ぬぜ」

その言葉を無視して俺はバイクに向かう。

「おい、聞いてるのかよ!!」

俺の肩を掴んで無理やり振り向かされる。

だから俺は顔を殴ってやった。

「ぐばあああああああああああ!」

吹き飛ばす少年

「はっ! 黙ってるよ小物が!!」

「なん、だと、テメエ!」

ヨロヨロと起きてくる少年

「テメエの親父は必死に一人で戦ってるんだろ? ならなぜに助けに行かない?」

「だってそりゃあ、戦力差がありすぎて無茶すぎるだろう?」

「なら無茶なことにも挑めない小物は黙ってる」

「だから誰が小物だって!?!」

「お前だよ」

俺はバイクから離れ、少年に近づく

「お前は圧政を強いている当主に立ち向かったのか?」

「なにを言って——」

「お前の親父は今も一人で立ち向かってる、大勢の兵士を連れて逃げた息子と違ってな」

「分かってるさ! だけでもよ!」

『『だけど』も『もしも』も要らないんだよ。世界はいつも決意し行動を起こしたものだけを認める。お前はなにもしないのに諦めているだけだ』

今度こそ俺はバイクに跨り、城へと向かう。

さあ、やってやるぜ。

去っていったあの野郎の言葉がまだ胸に残ってやがる。

『世界はいつも決意し行動を起こしたものだけを認める。お前はなにもしないのに諦めているだけだ』

わかっている、わかっているさそんなこと。

「.....親父」

ちくしょう、あいつの拳が重すぎて頭がどうかしそうですぜ。
それこそ無茶な挑戦をしたくなるぐらいによ。

余談ではあるが

その後、グシヤラボラス家の御家騒動は多くの怪我人と死者を出し
終結した。

そして最後まで前線で戦っていたグシヤラボラス家現当主は『この
騒動を静めたのは一人の旅人である』そう語ったそう。

都心の冥界

「バアル家の無能が——」

ドゴンツ!

激しい打撃音! ヤンキーは言葉を全部言い切る前に——サイラオーグさんの一撃で広間の壁に叩き飛ばされていたっ!

ガラツ……。

壁からヤンキーが崩れ落ちて、床に突っ伏していた。

—— 一撃!

あんなに強い魔力を放っていたヤンキーをたったの拳一撃で!?

「言つたはずだ。最終通告だと」

迫力のあるサイラオーグさんの言動に、

「おのれ!」

「バアル家め!」

ヤンキーの眷属が主をやられた勢いで飛び出しそうになるが——

「主を介抱しろ。まずはそれが貴様らの「それには及ばねえよ」……なんだと?」

サイラオーグさんの言葉を遮つたのは他でもない飛ばされたヤンキー

「おいおい、凄い打撃音だったのに気絶もしてないのかよ!?

ごろりと転がり、仰向けになるヤンキー

「お前ら、今すぐ拳を収めろ。今回の件は俺が先に挑発したのが原因だ、これ以上こちらが醜態を見せるんじやねえ」

「しかし「良いから収めねえか!!」はいっ!」

なんでだろうか、殴られる前よりも殴られた後の方が恐さは減ったけども迫力が増してる。

ヤンキーは立ち上がり、メガネの姉ちゃんに振り返る。

「アガレスの、今回はすまなかつた。どうやら俺も興奮してたみたいでつい挑発をしてしまった。まだ会合まで時間はあるし、化粧を直し

てい」

「え、ええ、わかりましたわ」

メガネの姉ちゃんは化粧を直しにどっかに行ってしまった。

「バアル家の、すまん助かった。お前が殴ってくれたおかげで上っていた血が下がった」

「いいや、礼にはおよぼん」

「それでもだ、まだまだ俺も修行が足りねえな」

首をゴキゴキと鳴らして言うヤンキー

「しかし俺は気絶させるつもりで殴ったのだがな？」

「ははは、耐えられた理由は簡単さ。過去に一度、お前よりも何もかもが上の拳を受けたことがあるからだよ」

なんだって、あれよりも凄いのを受けたことがあるのか!?

俺が驚愕しているとヤンキーは俺に近づいて来た

他の仲間達が警戒態勢を取る中、ヤンキーは俺の目の前に立ち

「お前、兵藤旅人って名前に聞き覚えはあるか？」

「……俺の兄貴ですけどもなにか？」

なんで兄貴の名前をこいつが知ってるんだよ？

「そうか、ならば旅人に伝えてほしいことがある」

ヤンキーは突然、俺に頭を下げてきた。

「お前の兄貴にグラシヤラボラス家は多大なる恩がある、もしも力が必要になったら言ってくれ。その時はグラシヤラボラス家が総力を持って助けると、これは俺ら一族の総意だ。最後にもう一度、一族の代表としてお前の兄貴、兵藤旅人に礼を言う。ありがとう」

それだけ言うとヤンキーは元の場所に戻って行った。

兄貴……あんなにしたんだ？

会合から少し前

「おお……これはまた」

俺はアイラからもらったバイクで旅を続けている。

そして今日、ようやく街に辿り着いた

「なんか空は紫なのに東京みたいな街だな」

もしやここはパラレルワールドなのだろうか？

まあ、冒険できるならあまり関係がないけど

「きやあああああああああ！ リアス様く!!」

五月蠅え！

なんだと思つて声が出た方を見たら馬車の中から手を振るリアスがいた

「ほう、なかなかソックリじゃないか」

てか似すぎ、まるで本人みたいだもん

でもこんなところに居るわけないし、違うよな

今日はこの街に泊まっていこう

俺は宿を探しに行こうとしたら

「見つけたぞ！ その貴様、待つのだ!!」

後ろから車に乗り猛スピードでやってくる集団

あいつらは数日前から俺を追ってきている

理由は簡単

あいつら警察、俺は密入国者

「捕まる訳にはイカンのだよ!!」

「逃がすかあああああああ!!」

なんでカーチェイスをしなきゃならねえんだ！

追ってくる警察の連中

だが舐めるな、アイラ印の改造バイクはそんなにちんたら走つてはくれないぜ!!

アクセルを全開にする

時速500kmほどの速度で走りだす

「え………?」

待て待て待て、落ち着け——

「ギャアアアアアアア!?!」

俺は風の如く都心部から離れて行ってしまった
いつかアイラに再開したら文句を言わなきゃな

ライザー・フェニックス

都心部でのカーチエイスから半月、俺はこのどこともわからない世界で旅を続けていた

いやあ、一週間前まではマジで大変だった

銀髪のメイドに追いかけられて、魔王を名乗るメイドの主人に変な光球を放たれたり

うん、何度も死にかけた。

とにかく俺はバイクを走らせている

この世界は森が多いなあ

そんなことを思いながら流れていく景色を眺めていると木に縄を吊るして首を掛けようとしている人間が――

「ちよおおおと待てええええええええええ!!」

「ぐわあああああああ!」

あ、つい慌ててたから間違えて轢いちやった。

俺は赤龍帝に負け、リアスとの婚約を破棄させられてからずっと考えていたことがある

伝説の龍の力を宿しているとは言え相手は悪魔に転生して間もな

い

そんな相手に負けてしまい、婚約を破棄され、俺にはなにが残っている?!

眷族達のほとんども俺に愛想を尽かしているようにみえる

そんなことを何度も考えているうちに死のうとする自分が現れた

俺は素直にそんな自分に従い、家を離れて自殺しようとした

だが俺はフェニックス、不死鳥の一族

生半可なことでは死ねない

あらゆる手を試していて、今日は首吊りをするつもりだ

領内にある森の中、木に縄を掛けて輪をつくり首を掛けようとし

たら

「ちよおおと待てえええええええええ!!」

いきなり一人の男が叫び声をあげながらバイクに乗り猛スピードで突進してきた

「ぐわあああああああ!!」

そして轢かれた

「だ、大丈夫か!? まだ傷は浅いぞ!!」

いや、それは俺が不死鳥の力があるからだ

普通の悪魔なら今ので死んでるか重症ものだ

「ぐう、貴様は何者だ?」

「おお……本当に生きてた」

質問には答えてもらえてはいないがどうやら自分のやったことについては自覚があるらしい。

「もう一度聞くと貴様は何者だ?」

「俺か? 俺の名は旅人、世界を旅する自由な旅人さ」

旅人だと?

俺が怪訝に思っていると男の見透かされるような黒い瞳が俺の瞳を覗きこんできた

「……ちよいと一緒に釣りしないか?」

「はあ?」

「いや、だからさ。釣りしようぜ」

どうせ死ぬつもりだったのだしそれも一興か

旅人と出会った場所から少し離れた場所

大きな滝の下流にある川辺に二人で来ていた

「釣竿がないのにどう釣りをするのだ? まさか素手でやるわけではあるまい」

「ん? それでも構わないけどそれは釣りじゃないだろ?」

そう言うと旅人は近くにあった木の枝を二本だけ折って戻ってきた。

「これに持参した糸をつけて枝を釣り針の形にして先を尖らせると完成だ、ほれ作れ」

旅人に促され俺は渡されたナイフで真似をしながら作る。

途中、何度か指を切ってしまったがやってみると案外楽しくて集中していた。

「で、出来た」

出来た釣り針を旅人に見せる。

「おお、初めてなのになかなかの出来じゃないか」

見る限り世辞のようではないようで、俺は少し嬉しくなった。

次に餌を取ったのだが、冥界ミミズを素手で触るのには少しだけ滅入ったのは内緒だ。

「さて、餌も十分に取ったし始めるか」

岩場に座り釣りを始めた旅人に習って横に俺も座る。

開始してから数分経つが反応がないことに俺は段々と苛立ってきた。

「ははは、そう苛立つな。もっと心を静めなきゃ魚は寄ってこないぞ」

俺はその言葉でハツとなり、深呼吸をして落ち着く。

そうだ、野生の動物は殺気に敏感なのだ。

「なにがあなたにあったかは知らんが、今は過去の事はいったん忘れて、目を閉じてこの自然を感じてみる」

自然を感じる？

意味が解らなかったが、とりあえず耳を澄ましてみた。

すると、木々が風によってざわざわと鳴っているのが聴こえてきた。

鳥が鳴く声が、川の流れる音が、風が吹く音が、さまざま音が聴こえてきた。

鼻で息をすると水の匂いがしてきた。

森の匂いが、水の匂いが、動物たちの匂いがしてくる。

「そしてゆっくりと目を開けて」

言われた通り目を開ける

空を見上げるとそこはいつもの魔界と同じで紫色の空だった。

だけでもなんでだろうか、いつもより美しく見える。目の前を向き、周りを見渡してみる。

さつきまで灰色だった世界が、今では色鮮やかに輝いて見える。

「どうだ、なにか気持ちは晴れたか？」

「……ああ、最高の気分だ」

俺は様々なものを失った。

仲間であり、誇りであり、名誉であり、地位であり

失ったものはデカく多い。

だがしかし、逆に今の俺には何が残っている？

それは分からない、けどもそれを見つけたら俺はそれを一生大事にしよう。

今度はごぼさないように、しっかりと抱きしめて、共に歩んで行こう。

「なあ、貴方の名を覚えていたきたい」

「俺の名は旅人、兵藤旅人だ。気軽に旅人と呼んでくれ」

兵藤？ まさかとは思うが——

「旅人、お前の家族に兵藤一誠というやつはいないか？」

「俺の弟の名前だな」

弟？ くくく、これはなんの皮肉だ？

弟に破れ失われ、兄によつて救われる。

どうやら俺は赤龍帝の一族に縁があるらしい。

「そうか、なら良いんだ。俺の名はライザー・フェニックス、覚えておいてくれ」

「わかったぜ、ライザー」

がっしりと握手をする。

「あ、これは俺の電話番号だ。もしもの時は電話してくれ、フェニックス家ではないが俺がお前に力を貸そう」

「生憎と携帯を持ってないから簡単に連絡は出来ないが家に戻ったりしたら手紙でも書くさ」

「ああ、それとこれは友になった印ではないが友に送りたい」

俺は懐から小瓶に入った、『フェニックスの涙』を三つ渡す。

「なんだよこれは？」

「む、そういえば旅人は人間だったな。それは『フェニックスの涙』といつて……簡単に言えば超凄い回復薬だ」

「へえ、そりゃあ大事にしなくちやな」

その後、俺達は他愛もない雑談で盛り上がりながら釣りを楽しんだ。

「本当にいいのか？」

「ああ、構わない」

それから翌日、俺は旅人と別れることにした。

バイクで家まで運んでもらえるらしいが敢えてそれは断った。

「随分と遠くまでできてしまったが、なんとなく今は歩いて帰りたいのだ」

「……なるほどね、じゃあ俺は別れさせてもらうか」

「ふふふ、いつかは家に遊びに来てくれ。歓迎しよう」

「そりゃあ楽しみだ、御馳走を期待してるぜ？」

「任せておけ」

もしも来たときは我が家の料理人の総力を持って絶品な料理を作らせてやる。

「じゃあ、またな」

「ああ、また会おう」

コツンと突き出した拳を合わせて、笑いあい旅人は走り出した。

その背中を見送り、俺は家の方向を向く。

「さて、ここから一週間も掛かるが……悪くはないな」

せいぜい自然を楽しみながら歩くだけでもするか。

オーフィス

俺の目の前に立っているゴスロリの美少女が俺を指さして言った。
「気に入った、嫁にする」

「だが断る」

なんでこうなった？

時は二日前に遡ることになる

俺がライザーと別れてから数日、山岳地帯を走っていた。

今更だがこのバイクってなにを燃料に走ってるんだ？

ガソリンだとしたら相当、燃費が良すぎるぞ

密かに疑問を持ちながらも走らせていると残念ながら崖で行き止まりになっていた

「ふむ、なかなかの絶景だな」

この先に進むにはどうやら一旦戻って先ほどの分かれ道を左に曲がって山を降りて行かなければならないらしい

でも道を間違えたおかげでこんな絶景が見れたのだし別に良いか

少し腹が減ってきたし、今日の昼はここで食べるか

「——誰？」

突然、上から女の声がした。

顔を上げてみるとゴスロリ服を着ている美少女がいた

「……黒か」

「？ お前、黒？」

「違う違う、なんでもない。俺の名は兵藤旅人、世界をさすらう旅人
や」

俺を下から上まで品定めするかのように見てくる

「ま、とりあえず嬢ちゃんも一緒にどうだい？」

「我、オーフィス。」

「なんかかっこいいな、とにかく名前は覚えてたぜオーフィス」
するとどこか満足そうに頷き、俺に近づいてきた。

さて、仕度を始めるか

「旅人、地球から、きた？」

モグモグとお握りを頬張りながら話してくるオーフィス

「おう、なんか知らんが光に包まれて目を開けたらいきなりこの世界にいた」

オーフィスの話によるとそれは次元転移 “魔法” ではないかと言
う

「じゃあアザゼルは魔法使いなのか……？」

「アザゼル、堕天使の総督」

………はい？

「旅人、この世界、なにも知らない？」

「恥ずかしながらまったく知らん」

オーフィスの話によるとこの世界は人間界で言うところの冥界らしい

つまり今まで会ってきた奴等は全員、人ではなく悪魔ということになる。

まあ、だからと言ってどうということはないが

むしろ、悪魔と友達になれたと自慢できる

「じゃあ俺は地球に帰れるのか？」

「出来る、割りと簡単に」

そっかあ、安心した

「じゃあこれで心置き無く旅が続けられる」

俺はオーフィスが食べ終わったので片付けてバイクに向かう

「どこへ行く？」

「旅の続きだ」

例えこの世界が冥界だとしても所詮俺は旅人

旅を止める理由にはならない

「オーフィスはこれからどうするんだ？」

思案顔をするオーフィス

「暇、着いて行く」

こうして俺の旅路に新たに仲間が加わった。

それからと言うものの俺達是一緒に行動し続け、時には村に訪れ魔物を退治して食事を貰ったり、自然の中で一緒に昼寝などをしたりと沢山のことがあった。

そして一週間が経ったある日の夜

俺とオーフィスは森の中の湖の畔で火を挟んで食事をしていた。

「旅人」

俺が焼いている途中の魚を見つめているとオーフィスが話しかけてきて俺を見つめてきていた

「なんだよ、魚ならまだだぞ？」

そんなにこいつつてば食いしん坊だったか？

「魚じゃない」

なんだよ、面倒くさいな。

そう思いつつも俺はオーフィスの言葉に耳を傾ける

「この一週間、悩んだ」

なにがさ

立ち上がり俺の前までやってくるオーフィス

「この姿、お気に入り、きつと旅人と出会う為」

俺の目の前に立っているゴスロリの美少女が俺を指さして言った。

「気に入った、嫁にする」

「だが断る」

急になに言ってやがるんだコイツは

「旅人、ただの人間、でも、気に入った。我がもの」

「そんなこと知らないな、俺は誰かの下に着くつもりはない」

えーと、確かこいつの組織ってカオスなんちゃらだったよな。

「なら無理やり、連れて行く」

オーフィスの右腕が突然、グレートレッドのような姿になって俺に迫る。

なんだよ、悪魔ってこんなことできるのかよ!?

「いいや……この感じはお前ってドラゴンか!?!」

「? そろっ?」

迫ってくる右腕を俺は横に回転しながら受け流し、ついでに鱗と肉を抉って行く。

「ちい、右腕をもぎ取るつもりだったんだがな」

流石にそこまで甘くはないか。

「……………」

俺は距離を置いて構えると、オーフェイスがジツと自分の右腕を見つめていた。

「無限の力を有する我に傷を与えた? 魔力も、妖力も、仙力もないただの人間に?」

なにかおかしいのか徐々にその顔は笑顔になり

「く、くはは、くはははははははははははははは!!」

次第に大声で笑い出した。

「無限の我に傷をつけた? やっぱり面白い」

あ、やばいぞ、オーフェイスの目がグレートレッドが切れた時と同じ目をしている。

「ここは逃げるか」

バイクに急いで跨り、オーフェイスから背を向けて走り出す。

「逃がさない、絶対に手に入れる」

「ちくしよう、なんだってんだよおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!」

その後、俺はなんとか逃げ切れたものの、二日間はバイクで走り続けたのだった。

パーティーの裏側で

なんとかオフィスから逃げ切り、バイクを押しながら森を歩いていた

え？　なんでバイクで走らないのかって？

馬鹿野郎！　そんなことしたらエンジン音で付近を徘徊してるかもしれないオフィスに見つかるだろうが!!

それだけはイカン

あいつがドラゴン形態になったら俺も闘うしかない

なんか無限の力がなんちゃらかんちゃら言ってたけど、俺は人間だしドラゴンとそう何度も闘う気はない

そんなことを考えていると遠くの空からやってくる飛行物体を発見！

オフィスか!?

慌てて森に隠れて上空を過ぎて行くのを見守る

ん？　オフィスじゃない、他の竜か

安心した

よし、じゃあ先に進も——

「見つけたぞ、旅人」

ギギギと首を動かして振り返るとそこにはゴスロリファッションの少女がいた

「出たああああああああああああああああああ!!」

俺は逃げた、全力で、アクセル全開にして逃げた

「逃がさんぞ」

「来るなよおおおおおおお!!」

さつきから後ろで「ボロボロにして我が介抱すれば」とか「洗脳して我に従順にする」とか言ってるし

冗談じゃねえ、そんなことさせられてたまるかよ。

竜人化しているオフィスが攻撃をしてくる

俺はその迫りくる火球などを潜り抜けて二時間のカーチエイズでなんとか逃げ切れた。

同刻、一誠は空を飛んでいた

「ツッ!」

な、なんだよ今の感覚は

「ドライグに小僧……今のを感じたか?」

『ああ、だがまさかこの魔力は』

「今のってまさか……ドラゴンが戦ってるのか?」

しかも強力なドラゴンだ

ドライグを宿している俺も今の感覚を感じ取れた

『まさかとは思うが今の懐かしい竜の波動は……』

「そんなはずがない、あやつがこんな場所に現れる上に闘うはずがなかろう」

『それもそうだな』

むむむ、なんかタイニーンのおツサンとドライグが俺には分からない会話をしてる

でも今の感覚、さつき通ってきた方角だ

なにがあつたんだろう?

「し、死ぬかと思った」

森の中にある開けた場所でorzしながら泣いていた

それはもう号泣さ!

なんだかストーリーカーに追われている女性の気持ちが悪くわかるよ
うになつてきた

確かにオーフィスは可愛いよ?

でもヤンデレっぽいし、ヤンデレは守備範囲外だし

なんとか立ち直り俺は顔をあげる

「こうしていても仕方がないし、もっと遠くに逃げるか」

結局は逃げることにした

「き、貴様は!」

男の声があったので振り返るとなんか白髪っぽい人が睨んできてい

た

「誰だよアンタは？」

「貴様、俺の顔を忘れたのか!!」

いや、ごめん

マジで誰だアンタ？

「まあ良い、ここで会ったが百年目とも言うし以前よりも強くなった俺の力を見せてやる」

だから名乗れよ

「禁手（バランス・ブレイク）!!」

男が叫ぶ。その姿は以前、学園で見た白い奴だった

「死ねえええええええええ!!」

『Divide!』

なんか身体が重くなって動きにくい

「だから、遅いって」

ジグザグに動きながら俺に迫ってくる白いのを手首で払う

「ぐああああああああああ!!?」

それだけで吹き飛ぶ白いの

なんだよ、前よりもほんの少しだけしか変わってないじゃんか

ドゴオオオオン!

「ん?」

なんか向こうの空でさつき見たドラゴンと雲に乗ってる猿が戦ってる

冥界は不思議が沢山だな

「あつちに行ったら面倒臭そうだし……どうしたものか?」

なんだかグレートレッドと似た感じの気配が跳ね上がった

でもあえて俺は近づかないね

だって後ろからオーフィスが猛スピードで迫ってきてるから

「だから、誰か助けてえええええええええ!!」

もう嫌、こんな生活

帰宅

「逃げ場ない、旅人」

俺の後ろは断崖絶壁

くっ、俺はこのまま捕まって洗脳されるしかないのか？

「否、俺はこんなことでは諦めん!!」

かくなる上はオーフィスと戦って勝つしか――

「本気、見せる」

戦闘力が53万の人の状態（第一形態）

戦闘力が謎な半竜化（第二形態）

そして今、目の前で最強の完全竜化（第三形態）が行なわれようとしているとでも言うのか!!

「やっぱり無理!」

ごめん、俺は無力だよ

オーフィスから背を向けて、崖からバイクで飛び出す。

アイラのバイクなら水の上も走れると信じてる!!

自由落下で内臓が上に向かって行く時の独特な感じがしながら俺は下にいきなり現れた空間の裂け目に吸い込まれた。

「嘘でしょうおおおおおおおおお!?!」

親父、お袋、一誠、俺ってば、無事に帰れないかもしれない

俺達が冥界から帰ってきて、眷属のみんなが家に引越しが完了し始めたが兄貴が帰ってきてきてない。

子猫ちゃんは俺に甘えてきてくれるようになったが『やっぱり膝は兄さんの方が数倍は上です』と言われてしまった。

アーシアとゼノヴィアの二人も同じ意見らしい。

てか子猫ちゃんがやばい。

毎日『お兄さんはどこですか?』って聞いてくるし、『お兄さんが居ないだなんて鬱になります』とか言ってるし

日に日に子猫ちゃんから発せられる負のオーラが増していつてる。

そんなことを思いながらリビングから広くなった庭を見てみると
「死ぬ、今回はマジで死ぬかと思った」

庭で見たことがないバイクの横でorzして号泣しながらなにか
ボソボソと言っている兄貴がいた。

思わず飲みかけていたお茶を木場に吹き掛けてしまった。

「イツセー君、僕なにか君に悪い事でもした？」

「ごめん木場！ 兄貴が庭で号泣してたから思わず吹いただけなんだ
よ!!」

「お兄さん!?!」

ああ、子猫ちゃんが窓を割って庭に出て行く。

「ぐばあああああ！ まさかのスピアタックルだとうう!?!」

やばいな。今、兄貴の体が横にくの字に曲がってたもん。

「お兄さんお兄さんお兄さん!!」

「おおう、なんだなんだ!?! って子猫か、どうした？ イツセーに苛め
られたのか?」

ちよつと待てや兄貴、なんで俺が子猫ちゃんを苛めるんだよ。

「違います、今までどこ行ってたんですか!?!」

「旅」

それで全て納得させるのが兄貴クオリティー

とにかく、俺は子猫ちゃんが破ってた窓の修繕をどうしようかと悩
むのであった。

「へえ、リアスの実家は楽しかったのか？」

「はい、とてもためになりました」

俺はこの家の居候がみんな居間に集まるまで子猫を膝に置いてチ
ラシを見つつ、子猫の撫でながら話を聞いていた。

「うん、なんとなくしかわからないけども前よりも強くなったな」

「えへへ／／／」

やはり子猫は可愛いな。

いや、子猫だけではなく俺の妹分は全員が可愛いぞ!!

「あうう、どうしまししょうこれ」

そう思っているとアーシアが涙目で居間にやってきた。

「どうしたんだアーシア？」

「あ、おかえりなさいですお兄さん」

トテトテと近づいてくるアーシアの頭を撫でてみる。

「あわわ・・・久しぶりですこの感覚う」

とりあえず嫌がってないみたいなので安心した。

「あ、兄さんお帰り」

「おう、ただいままだなゼノヴィア」

同じく近寄ってくるゼノヴィア

ゼノヴィアの頭を撫でると少し恥ずかしいのか頬を赤らめてる。

「あらあら、兄妹で仲が良さそうですね」

「お帰りなさい旅人」

次にやって来たのはリアスと朱乃

リアスの紅髪を見るとつい都心部で追ってきた自称魔王とメイドを思い出しちまうぜ。

「ただいま、残念ながらお土産はないぞ」

「「ええ〜」」

いや、妹たちよ。そこまで嘆かないでくれ。

さて、そろそろ全員がそろったのかな？

あとは木場と一誠か

「ごめん、遅れた」

「ごめんね義兄さん、寝坊した」

木場、あとでチョコクスリーパーな

さして、全員そろったか。

俺になんか話があるとか言ってたからここに居るんだが正直追われ続けてたしぐつすりと眠りたい

「兄さん、気になったんだけどもなに読んでるのですか？」

「これか？ 駒王学園の職員募集案内」

一瞬、場が静寂に包まれる。

「えええ!? 兄貴就職するの!?!」

「まあ、清掃員としてだけだな。流石に教師とかは無理だ」

体育の先生とかは嫌じゃないけども教員免許取るのが面倒だ。

「駄目か？」

「いやいや、駄目じゃないけどもなんでまた急に!!」

急になってわけじゃないぞ、夏休み前から決めてたもん。

「なんかさ、あそこって俺の勘が面白そうだって告げてるんだよね」

「・・・じゃあ生徒として来れば良いのではないかな兄さん」

「ゼノヴィア、それは駄目よ。今から入ったら私と朱乃と同じ学年、つまりは三年生で受験やらなんやら言われるから」

「どうせ貴方のことだからそんなところでしよう？」

「それ大正解!」

親指を立てながら言うところの場にいる全員が頭を抱えてしまった
何故だ!?

「まあ、今それは置いておくとしましようか」

リアスの顔が真面目になり、子猫に首撫でを始めた俺はつついそ
の可愛さに頬を緩ませる

「にゃ〜」

「可愛いいな、コンチクシヨウ!!」

和む、異常なまでに和むぞ!?

「はいはい、その二人。イチヤつくのも良いけど話を聞いて」

なんだよ、和んでいたいのに

渋々と俺はリアス達の方を見る

「話しというのはね、アーシアについてなの」

アーシアについて？

「嫁にはやらんぞ?」

「……それについては私も同感だわ」

「ええ! 同感しちゃうんですか!？」

イツセーさーん! って言いながら一誠に泣きついてしまうアーシ
ア

「でも今回は結婚とかじゃなくてアーシアがストーカーされてるの
よ」

……………ほう？

「毎日毎日、手紙やプレゼントが大量に送られてきて内容めアジアに対する恋文。アジアにはその気がないから無視をするように言ってるんだけど日に日に悪化してるの」

ハアと溜め息を吐くアジア

よろしい

「犯人は分かっているのか？」

「ええ、もちろん」

「名前は？」

俺はとりあえずライザーに電話を掛ける

冥界だから通じるか不安だったけど案外普通に通じた

『分かった、事情は把握した。テイオドロ家が相手だが貴様の頼みなら調べあげてやる。丁度そいつにはある疑いもあるからな』

「疑いって……まあ良いや、恩に着る」

ガチャリと受話器を置いて電話を切る

居間に戻って俺は皆に言った

「信用のできる情報屋に頼んだからしばらくしたらそいつの情報を洗いざらいにして社会的に殺してやる」

「え？ いや、兄貴それはなかなか難しい人物だと思うよ？」

「心配すんな、家の家族に……妹に手を出そうとしたんだ。兄貴として例えそいつが異世界に居ようと潰す」

「……………本当に旅人ならやりかねそうね」

「なんでしようね、この妙な説得力は？」

ハハハ、リアスに朱乃よ

マジで逃亡先が冥界ぐらいたったら逃がさんよ

だけど冥界だとオーフィスが居るかも知れないから嫌だな

関係ない話だけど、ゼノヴィアのボディラインがエロく感じるの俺だけ？

わかってるよ、これがオーフィスからの現実逃避だって。

でもさ、ゼノヴィアのボディラインのエロさは凄まじいのだよ。

君達に分からないだけでね!!

「む？ どうかしたのか兄さん？」

「いや、なんでもない」

危なかった、もう少しでバレるところだった。

さて、じゃあ後は風呂に入って報告が来るのを気長に待ちますか。

久しぶりのベットで睡眠をとれることにウキウキしながらも俺は風呂に向かうのだった。

その頃、冥界の某所で

「旅人、どこへ逃げた！」

未だに冥界を探し回っているオフィスだったりした。

閑話・旅館

「兄貴……本当にやるのか？」

「旅人、もしもことがバレたらどうする気だ？」

「そうだよ義兄さん」

「そ、そうですよ。流石に不味いんじゃないですか？」

「……………」

とある場所の一室、暗闇の中で四人の男たちと一人の女の娘が座っていた。

「……それでもだ、俺達はやらねばならない」

「でもっ！」

旅人の言葉に声を荒げて反応するイツセー

「黙っておけ一誠、覚悟がないのならここから去れ」

旅人は真面目な顔で言い放つ

「他の者もそうだ、ここからは覚悟がないものは去れ。覚悟がある者だけがこの先に共に歩むことが許されている」

そう言う旅人からは覇者の如きオーラがにじみ出ている。

「僕は義兄さんに付いて行くよ」

「俺もだ」

木場とアザゼルは旅人の言葉に同意する。

「僕も参加させていただけます!!」

決意を固めた顔で返事をするギヤスパー

「さて、あとはお前だけだ一誠」

この部屋に居る全員の視線がイツセーに集まる。

「俺は——俺は進むよ、この先の領域に!!」

「ふっ、良い顔になった。——では、行くぞ！」

「「おう!!」」

今、熱き男たちの戦いが始まった。

時は少し前に遡る。

事の発端は二日前、旅人が商店街のくじ引きを引いた時に起きた。

「二等が出たよ、おめでとうございます！」

「え？」

カランコロンと鈴を鳴らすくじ引き所のおっちゃん。

「二等は四泊五日の箱根温泉の旅ペアチケット！」

はい、と軽く渡された俺

箱根温泉旅行のペアチケットか……たまには親孝行してやるか。

「え？ 良いのかい旅人？」

「ああ、たまには夫婦水入らずで行ってけると良い」

「あらく、しかも混浴だなんて気が利くじゃない。流石は私の息子」

ははは、褒めるな褒めるな。

「じゃあ、明日から行きましようかあなた？」

「じゃあさつそく用意しなきゃな」

部屋に戻って行く二人、なんとも嬉しそうでよかった。

さて――

「アザゼル、そこに居るのはわかっている」

「ほう、よく私の存在に気付いたな」

「くくく、貴様から放たれる殺気に気づかぬとでも？」

「ふつ、それもそうか」

つて、なにその喋り方？

殺気とか適当に言ったけども正解だったんだな。

「アザゼル、お前に聞きたいことがある」

「なんだよ？」

冥界で、ずっと思っていたことがある。

天使、堕天使、悪魔の三大勢力の話

異能の力が俺の家に浸食している件

「お前ってさ――」

もしも、こいつが俺の予想通りならばその時は――

「ゼノヴィアのボディラインってどう思う？」

「エロくて最高だ」

ガシツと堅く握手をする俺とアザゼル

「だよな！ お前なら分かってくれると思った!!」
ずつと冥界でオーフィスを見てて思ったんだ。
『そういや、ゼノヴィアもなかなかエロいよな』って
「ああ、任せてくれ。俺は乳の為に堕ちるぐらいだ」
流石です、アザゼルさん。

俺と木場とギヤスパーで俺の部屋でトランプで遊んでいると居間から大きな音が聞こえてきた。

なんだと思つて俺達は三人そろつて様子を見に行った。

両親はさつき出かけたし、女性陣も朝から買い物だし……一体誰がどうしたんだらうか？ 恐る恐る居間を覗いてみると兄貴が先生と殴り合つていた

「ダメエ、ふざけてんじやねえぞ!!」

「それはお前だらうがアザゼル!!」

ちよ、なにやってんの二人とも!?

ガチすぎる殴り合いなので俺と木場は二人を羽交い絞めにして喧嘩をやめさせた。

「離せイツセー、こいつはぶん殴らなきゃ気がすまん!」

「木場、今すぐアザゼルの野郎を殴らせろ!」

やばいつて、二人とも頭に血が上りすぎてる。

「落ち着いてください先生!!」

「義兄さんも冷静に!!」

その後、最終的に兄貴に気づかれないようにギヤスパーの目の力も使つてなんとか喧嘩を落ち着かせた。

「で、なんで二人は喧嘩してたの?」

二人が落ち着いたところで俺はあくまでも中性の立場での事情調査を行う。

「それがな、最初は二人でゼノヴィアのボディラインがエロいよなつて話で盛り上がったんだ」

昼間からそんな話を……しかも居間でしてたと流石です二人とも。

「そしたらリアスと朱乃のおっぱいも良いよなって話になったんだ」
最高です、あの乳は最高なんですよ！

「でな、ここからが本題なんだ」

途端に真面目な顔になる二人

「俺は爆乳よりも形の整って張りがある美乳が良いって言ったのにアザゼルは大きい爆乳の方が良いとか言い出したんだ」

ん？

「はっ！ お前は爆乳に顔を沈めたときの感触を味わったことがないから美乳が良いって言うんだ」

「ふん！ アザゼルこそ乳枕をしてもらったことがないから爆乳が良いとか言えるんだ」

あんたらそんなことでなぐり合ってたのか……最高だぜ！

「良いか？ 乳は乳房の大きさ、乳輪の大きさ、乳首の大きさ、透ける血管、乳腺のコリコリ感、弾力性、温度、鮮度、湿度、色、形、張り、感度、匂い、味、この15要素で決まるんだぞ？」

「そんなことは分かってる、だからこそその爆乳だろう？」

やべえ、話のレベルが高すぎる。

「これが……世界トップクラスの實力だとも言うのか？」

木場!? どうしたのいきなり!?

「流石ですね、完全に隙のない理論。これは膠着状態が続きますよ」

「よし、じゃあ温泉に行こう!!」

「「はあ?」」

どうしたんだよいきなり?

「実際に生乳を見に行こうって話だ」

「そこでお前とは決着を付けたやる旅人」

こうして、俺達は部長たちも含めて温泉に行くことになった。

「では前回、丸々一話使って回想を終わらせたのでそろそろ行こうか」

「お兄さん、いきなりメタ発言はやめてくださいね」

ギヤスパーの的確なツツコミが入ってきた

成長したなギヤスパー、あとで飴を買ってやろう

「参謀役のアザゼル君、此度の作戦と状況を教えてくれ」

「はっ、総司令殿」

非常にノリがよろしいアザゼル

「部屋の中央に地図を広げるアザゼル」

「現在、俺達が居る場所はここだ」

ビシツと指をさすアザゼル

「目的地はこの露天風呂、ここに行くまでにルートは二つ」

「外か中からだね」

「木場の言う通りだ」

「じゃあ、ここは二手に別れて行くのか？」

一誠、やはりまだまだ甘いな

「いいや、イツセー。この旅館の名前を思い出してくれ」

「そうこの旅館の名前は『グレモリー温泉旅館』つまりは資産家であるリアスの実家が経営している場所だ」

「まだオープン前で俺達以外に誰も居ないから他の客に迷惑を掛けることは無いが」

「グレモリーの防犯設備は凄まじい、二手に別れて行動した場合、下手をしたら全員が死ぬ」

「な、なるほど……」

恐るべしリアスの実家

「今回は中から攻める」

わかるか？

つまりは――

「スニーキングミッション スタートだ」

「なんか…男性陣が静かすぎませんか？」

「アーシアが身体を洗いながら皆に問う」

「確かに、アーシアの言う通りだな」

同じくゼノヴィアも身体を洗いながら同意する

「きつと覗きの計画でもしてるんです」

実はその通りな子猫の予測にアーシアとゼノヴィアの二人は納得

した

「そうね、アザゼルと旅人とイツセーが居るんですもの。まず間違いないでしょう」

「むしろあの三人が揃ってるのに覗きに来ない訳がないわね」

苦笑いしながら湯船に浸かるリアスと朱乃

「はあ、兄さんはまったく……」

「あら？ ゼノヴィアはイツセー君よりも旅人にご執心なのかしら？」

「え、ああ、いや……」

珍しく慌てるゼノヴィア

「お兄さんはそんな、えっちなことしません」

なぜか胸を張って言う子猫

「いいえ、まだ甘いわね。あのアザゼルとエロで渡り合える程の旅人が望きに来ないわけがないわ」

「」「確かに」「」

女性陣がそんな話で笑いあっている頃、男性陣はと言うと

「しっかりと手を握れ一誠!!」

「踏ん張るんだ旅人!!」

落とし穴に落ちかけている一誠をみんなで必死に引き上げていた
なんとか一誠を引っ張りあげて一息つく一同

「つたく、まだ先は長いってのにこの罠のキツさ。流石はグレモリ

ーの防犯対策だな」

「この落とし穴、そこに竹槍がありましたよ?」

下手したら命を失っていた一誠は泣いていた

「一旦、ここらへんで休憩がてら現状の確認だ」

旅人の言葉で全員が集まる

「皆、分かっているとは思いますが俺達はまだ四分の一も進んでいない。そして罠の危険度は先に進めば進むほど高くなっていく」

皆の顔が険しくなる

「通気孔には赤外線レーザーが張り巡らされていて突破は不可能、この道を進んで行くしかないのは必然的だ」

頷く一同

「ここからそこに見える曲がり角を右に曲がり、さらにその先の曲がり角を右に曲がる——そこがゴールだ」

U字路になっていている道の先に露天風呂の入口があるのだ

「では、時間もあまりないし進むか」

立ち上がり前を見据える一同

「なんでもない廊下に見えるけど実は危険な罠が盛りだくさんなんだろうねここは」

「正直言つて怖くてたまらねえ」

「僕は泣きそうです」

三人の言葉は弱気なものばかりだが後の二人は違った

「進むんだイツセー達、例えこの道がどんなに険しくても」

「そうだ、歩みを止めた奴は決して理想郷にはたどり着けない」

この時、一誠たち三人は思った

『この人達に付いていこう』と

「全員、進むぞ!!」

男達の冒険はまだまだ始まったばかりだ。

俺達の道のりは熾烈を極めていた

『ココカラサキハイカセンゾ、ニンゲンドモ!!』

俺達の目の前には高さが三メートルはあるゴツイロボット兵

「イツセー君、義兄さん、先に行ってください」

「木場、お前まさか……」

どこから出したかわからないけど木場は木刀を構える

「無茶だぜ木場！ こんなやつを一人で「分かった、任せたぞ木場」兄貴!?!」

イツセー、お前の気持ちは痛いほどわかるがここは木場の言った通りにしてくれ

「死ぬなよ」

「必ず理想郷（女湯）に一緒に行きましょう」

俺達は走り出す

「さあ、ご覧の通り君が相手にするのは剣戟の極地、無限の剣製、恐れずして挑んでこい!!」
死ぬなよ木場!!

木場が巨人を足止めして、なんとか一つ目の曲がり角を曲がれた。しかし曲がった先は地図と違って扉があり、中は大きな部屋があった。

ダンスホールらしく、凄まじく広く大きい部屋だ。

俺達は警戒しながら進んで行く。

丁度半分ぐらい進んだところで異変が起きた。

『侵入者の排除を開始します』

天井が突然開いて俺の腰ぐらいの高さがある、昆虫のような形をした機械がやってきた。

中には空を飛ぶタイプの奴もいる。

「ボケッとすんなイツセー! 死にたいのか!!」

先生の言葉で我に返る俺、そうだ逃げなきや!

全速力で駆けはじめる。

すると突如横から現れた鉄の壁によって向こうの道を防ごうとしている。

「な?」

マズイ、このままじゃこの部屋に取り残される!!

「うおおおおおおお!!」

雄叫びと共に、俺、先生、兄貴はなんとかギリギリで壁を抜けた。

でもギヤスパーは――

「おい、なに止まってんだよギヤスパー!」

閉じていく壁の向こう側で立ち止まるギヤスパーに俺は叫んだ。

しかしギヤスパーは微笑みながら壁の向こう側に消えてしまった。

「おい……ギヤスパー!」

閉じてしまった壁を俺は思いっきり何度も叩いて呼びかける。

『イツセーさん、アザゼル先生、お義兄さん、先に進んでください』

壁の向こう側からそういう声が聞こえた時、俺は思わず叩く手を止めてしまった。

『このまま全員で進んでもどうせこいつらは追いつきます。なら少しでも追いつかれるまでの時間を長くするために僕がここに残りますよ』

「無茶だギヤスパー、馬鹿なことを言ってるじゃな『先輩』」

静かに、それでいて力強い声でギヤスパーは俺の言葉を遮った。

『それでも僕は男の子です、心配しないでください。それに——』

少し溜めてギヤスパーは言う

『僕は先輩の仲間、リアス・グレモリー眷属の一人ですよ？』

ただ、俺はその言葉を聞いて下を向きながら涙を流すしかなかった。

『そろそろ行ってください、そしてまたゴールで会いましょう』

「っ！——ああ、またゴールで会おうぜ!!」

ギヤスパー、お前は成長したよ。

必ずまた生きて会おうな。

——行っただか。

僕は寄りかかっていた壁から離れて数歩前に進む。

『侵入者排除、侵入者排除』

目の前からは僕を排除しようと迫る百近い機械兵

正直言って怖い、今すぐにも逃げ出したい。

昔の僕ならきつと逃げ出してただろう。

でもそれは今の僕じゃ絶対にできない。

そんなことをしたら皆が先に進むために犠牲になった木場先輩に

顔向けできないもん。

迫りゆく大軍を見て、僕の頭を過る数々の思い出。

封印が解かれて、眷属の皆と過ごした生活

辛いことや悲しいこともあった。

でも毎日が楽しくて、笑った。

途中でお義兄さんも帰ってきて、賑やかだった日々が更に賑やかに

なった。

冥界でも沢山修行をしたな。

「さて、回想はここら辺にしておこう」

じやなきやこの決意が崩れちゃうもん。

「ふふふ、たかが雑兵の百や二百、相手になるよ。なんたつて僕は吸血鬼、そして兵藤旅人の義弟、リアス・グレモリーの『僧侶』なんだから!!」

だからこんなところで死ぬわけにはいかないんだ!!

「手を離すんだアザゼル!!」

「馬鹿野郎! 死んでも俺は手を離さんぞ!!」

「今、引き上げるから待ってるよ兄貴!」

俺達がああした後、なんとか二つ目を曲がりゴール直前と言うところで床がいきなり裂けた

落ちそうになった俺と先生のことを突飛ばして助けてくれたけどこうなってしまうている

俺が先生の足首を持ち、先生が兄貴の手を握っている

二人分はキツイけどここで俺が離れたら先生と兄貴が落ちちまう耐えるんだ俺!!

「俺に構ってる暇があるならば先に進め、でないと先に死んでいった奴らが無駄になる!!」

※木場とギヤスパーはまだ死んでません

「わかつてるよ! でもそれが兄貴を見捨てる理由にはならないだろう!」

「そうだ、むしろここで見捨てたとあっちゃあ、それこそ死んだあの二人に顔向けできねえ!」

※木場とギヤスパーはまだ死んでません

「……お前ら」

兄貴は目を閉じてなにかを少しだけ考えてから

「まったく、仕方ねえ奴らだぜ」

眩きながら兄貴は先生を殴った

反射的に先生は手を離してしまい兄貴は落下していく

「あばよ、お前ら。先に俺は逝ってるぜ」

ガハハと笑いながら落ちていく兄貴

「兄貴いいいいいいいいいい!!」

俺の叫びは底が見えない地下へと吸い込まれていくだけであった。

「……………旅人の野郎、勝手に逝きやがってよ」

涙を堪えて先生が呟く

「兄貴い…クソツツ!!」

なんでだよ、なんでそんな簡単に助かるのを諦めちゃうんだよ!?

木場、ギヤスパ、兄貴

三人とも俺達のために犠牲になった、でもそうじゃないだろう?

皆で一緒に覗きに行くことが目的だったじゃねえかよ!!

———
そうだよ、三人は俺達のために犠牲になったんだ。

「行こう、先生。みんなが作ってくれたこの時間がもったいない」

なら俺らはその期待に応えなきゃいけない。

死んでいった皆の為にも!!

※三人はまだ死んで（ry

そして俺と先生は断固たる決意を胸に最後の曲がり角を曲がりに行くのであった。

竹槍、機関銃、エロ本、転がってくる岩、様々なトラップを回避してなんとか最後の曲がり角を曲がりあとは最後の直線だけとなった。

「よっしや! 罠もなさそうだし突撃するぞ!!」

俺は嬉々として女湯の扉に手を掛けようとした。

したら——

「イツセー危ない!!」

先生が叫び声を上げながら俺を突き飛ばした。

なにが起こったのか理解できなかったが先生が仕掛けてあった罠に引っかかり電気でビリビリになった。

しかもそれが数分間も続いた。

終わった時には既に先生は黒こげになって倒れてしまっていた。

「せ、先生?」

俺はそつと倒れている先生を抱き上げる。

「イ、ツセー、か?」

「はい、先生。俺です」

「よく、き、くん、だ、ぞ」

これが最後の言葉になるかもしれん、と続ける先生

「前に、も、おっぱ、いは、無限の可能せ、いが、こめ、られていると、言った、な? 俺も旅人も、しよ、せんは、その、おっぱ、いに、踊らさ、れて、いた、だけだ……ゴホツ、ゴホツ、ゴホツ!!」

必死に、死にかけの状態で俺に伝えてくる先生

「良い、か? おっぱ、いは、揉む者によ、つて、意味が、変わって、くる。自分がおつ、ぱいを揉む理由を、間違え、るな。そして、疑うな

——ゴホツ!」

先生の手が俺の手を力強く握ってきた。

「ああ、良い人生だった。善き乳龍帝に、なれ、よ」

そして先生の手から力が抜けてするりと落ちていった。

「先生? 先生!」

何度も揺すってみるが反応がない。

先生まで——どうして俺の仲間はどうも勝手に。

「先生、木場、ギヤスパー、兄貴」

わかっているさ、どんなに悲しくても俺は進まなきゃいけないんだよな。

そつと先生を地面に置いて、俺は立ちあがる。

「みんな、俺は行くぜ!!」

扉の取っ手に手を乗せた瞬間に俺の体に凄まじい重みが掛かる。

なにが起こってるんだ!?

ゆっくりと俺は振り返るとそこには四人の魂が俺のそばに居た。

そっか、皆はずつと俺の側に居てくれたんだな。

「皆……わかったよ」

みんな揃って、ゴールしよう。

「さあ！　今こそ理想郷（女湯）の扉をいざ開か（ガララ）ふう、
良いお湯だったわね」…なん…だど？」

扉を開けようとしたら勝手に扉が開き、中からは部長たちが現れた。

「あ、あああ」

力が抜け、ガクンとその場で両膝をついてしまった。

「あら、イツセー。どうしたの、そんなにボロボロになって？」

湯から上りたての部長、とても妖艶でそそられるが今はそれよりも絶望の方が大きく、両目からは自然と涙が滝のように流れ落ちる。

「イツセーさん、どうしたんですか!？」

「イツセー君!？」

「先輩…?？」

「イツセー?？」

部長の後ろから、アーシア、朱乃さん、子猫ちゃん、ゼノヴィアが現れた。

全員、湯から上がっちゃったのか？

てことは完全に俺達の理想郷はないってのか？

「イツセー、なんで泣いてるか知らないけどどうしたの?？」

「そうですよイツセー君、そんなボロボロな姿で」

「と言うか、廊下も凄いことになってますよ!!」

ははは、なんてこった。

目を瞑って俺は仲間のことを思い出す。

「木場」

お前がああの巨人を足止めしてくれたおかげで俺達は先に進めた。

「ギヤスパー」

いつも怖がりなお前だけど、あのロボット兵に立ち向かう姿、この目で見れなかったけども間違いなく漢だった。

「兄貴」

俺達を罠から救ってくれた。けどこの手で掴んでいたのに、結局は俺の力不足で離しちまった。

「先生」

最後の最後で油断してくれた俺を助けてくれて、乳を揉む意味を考えさせてくれた。

みんなの力があつたからこそ俺はここまで来れた。

共に理想郷を見ることは叶わなかったけども、思いはちゃんと託されたはずだったのに――

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

床に頭と拳を叩きつける。

「なにが思いは受け取つただ! ただ俺は仲間を失つただけじゃないか!!」

そう、みんなから色々なものを託された俺が代わりに見なければならなかったのに、この様だ

「俺は、無力だ!!」

ごめん、みんな。

俺は覗けなかった。

かくして、俺はその後、一晩中泣いた。

今回の温泉旅行は仲間達を失い、心に大きな傷跡を残す結果となつてしまったのだ。

余談ではあるが、戦闘によって負傷した木場とギヤスパ、電気で麻痺したアザゼル、奈落の底に落ちた旅人が全員復活して戻ってきたのは温泉旅行の三日後の話であった。

事務職員

夏休みも残り一日、俺達は特になにをするでもなく家でノンビリしていた。

ちなみに俺はアースシアのストーカーの手紙の中に紛れていた俺宛の手紙を読んでいる。

送り主はライザー

わざわざこっちの世界の文字で手紙を送ってきてくれた
冥界の文字で書かれてもわからないだけだったし助かる

「へえ……禍の一人ねえ」

カオス・ブリケード

アースシアってば妙な連中に狙われてるのな

うん？

なんか禍の団ってどこかで聞いたような……

そこまで思ってた俺は便箋の中にまだ手紙が入っているのに気がついていた。

「ははは、楽しく元気そうに生きてんなこいつら」

そこには何枚かの手紙と農具を持って泥まみれになりながらも笑っている人たちの写真

その写真に写っている人達の中央には一人だけ繋ぎに工具を持って笑っている少女が居た

これはアイラの村の人たちだ

なんでも領主が変わってから一気に治安が良くなったらしい。

領主っていうとあのヤンキーの親父か

「うん、安心した」

あの親父さんなら大丈夫だ、ちゃんとやっていけるだろう。

あと、その領主のグシャラボラス家つてところが今度、冥界に来たら是非にお礼がしたいから立寄っていつてくれないかい

お礼ねえ……いらぬから寄らなくていいや。

「おや、なんの手紙かな、兄さん？」

「んあ？ なんだゼノヴィアか」

リビングにやってきたのはゼノヴィア

「そういや、やけに静かだな」

「なんだとは酷いな」

「すまん、やけに静かだから誰も居ないかと思ったんだ」

「他のみんななら買い物に行つたよ」

「お前は付いて行かなかつたのか？」

「特に欲しい物は売ってないからね」

喋りながらゼノヴィアは俺の隣に腰かけてくる

「このソファは三人用だから熱いし離れば良いのになんで俺の近くに座るのだ？」

「で、なんの手紙なのだ？」

「遠い場所に居る、俺の大事な仲間たちからの手紙さ」

「いつかまた会いたいぜ、お前ら。」

「行けるなら今すぐにでも行くけども、なんかまた不法入国だとか何とかで終われそうだな」

あの紅髪と銀髪メイドはもう勘弁したい

「今度、私も兄さんに付いていこうかな？」

「来たければ良いぞ、丁度バイクも二人乗れるし」

「けども俺は別に“いつも通り”の旅をするつもりだ。」

「もちろん命の危険もあるかもしれない、ゼノヴィアは強いのか弱いのか、そもそも戦えるのか分からないけども……もしもの時は俺が守れば良いか。」

「ほ、本当か兄さん！」

「本当だから零距离で話すのやめて」

「近いつかの問題じゃないからね、そんなおでこをグリグリと押し付けてこないで。」

「しかしこの喜びようは、ゼノヴィアも旅が好きなのかな？」

「これからどこかに行く時は誘ってやるか。」

「ま、可愛い妹分の頼みだ。それにこんな美少女と一緒に旅が出来るかもしれないってのに俺が断るか」

「一誠あたりには嫉妬されるかもしれない。」

てか、あいつハーレムもどきを作ってるし
むしろ俺が嫉妬したい

「そ、そうか、美少女か／＼／＼」
ゼノヴィアが顔を真っ赤にしている
なにがあつたんだ？

「そろそろ昼飯時だし、ソーメンでも作るか」
そんなほのぼのとした夏の一日だった。

翌日、みんなが始業式に参加しに学校に向かったあと俺も同様に学
校に向かった

ゆつくりと通学路を歩く

本来なら俺もこの道を生徒として歩いているはずなんだよな

そう思うとやけに学校に通っておけば良かったと後悔の念が浮か
んでくるが、あと一年もないのに行く意味だ。

時間は誰の都合でも待つてくれない

刹那の時を確実に進む

だからこそ人は生を謳歌しようとする

だからこそ人は感情をあらわにする

だからこそ人は醜い

だからこそ人は美しい

この刹那に全力で生命を注いでいる人間は眩しいのだ。

一瞬前までのことを懐かしみ切なくなるのは仕方がない
でもいくら切なくても今を生きなければならぬ

それが生きるということだ

「つて、なに考えてるんだらう俺は？」

柄にもなく哲学的なことを考えちまった

ゆつくりと歩き俺は駆王学園に到着する

既に面接には合格して今日が初出勤だ

新しい職場がどんなところかとドキドキしながらも俺は校舎の中
を歩く

案内板を見ながら事務室に向かい、事務室の扉を開ける

中はタイルの床で三畳ぐらいの部屋

真ん中に丸テーブルと椅子が二つ

あと隣の部屋に五畳の和室がある

「おお、あんたが新しく入ってきた人かい」

そして中にはヨボヨボの爺さんがいた

「あ、どうも初めまして。兵藤旅人と言います」

「これはこれは、ご丁寧にどうも。私は氣道玉神（きどうぎよくしん）と申します」

名前はとても厳ついが好々爺のような印象を受ける人だ

だがこの人、血の臭いがする

隙も見当たらないかなりの実力者か？

「まあ、座んなさいな旅人君」

「失礼します」

だが特にそんなことは関係がないので言われた通りに俺は氣道さんと机を挟んで正面に座る

「挨拶もすんだし、まずは仕事の話しかの？」

これが氣道玉神さんとの初めての出会いで、俺の人生に大きく関わってくる人との出会いだとはこの頃の俺には分かるはずもなかった。

オークション

「…………へえ、なかなかの殺気じゃん」

両親が寝静まってしばらくしてリアスや一誠達が外に出かけたあと俺も殺気を感じて出掛けていた

殺気を感じた数は二つ

向こうは誰が向かって既に戦闘が始まっているようだ

案外リアス達だったりしてな……それはないかwww

とにかく俺はもう一つの殺気の方に向かう

俺の予想ならばこの先に待ち受けているのは——

「ははは、ビンゴみたいだな」

見つけたのは残念ながら悪魔や堕天使ではなかったが、白衣を着たガリガリの男だった

「おや、君はどちらさまだい？」

「ただの通行人Aだ、気にせずに続けてくれ」

「それは助かるよ」

笑顔で答えた白衣の男はグツタリとしている女性に向かってまた腰を振りだす

女性の背中には六枚の羽根がついている。

白い羽が真ん中に二枚、そして黒い羽が上下に二枚ずつ。

あともう一人、少し離れたところに金髪の少女が拘束されていた。

拘束されている少女は気絶しており、触手で縛られている。

てか拘束の仕方が触手って、エロいな。

詳しくは言わないけども、少女の方はちゃんと清潔なまもらしい。

「その女を貰って良いか？」

「構わないよ———と言いたいところだけど、残念ながらそれは無理な話なのだよ。うっ、出る!!」

無反応な女の中に子種を出した白衣の男

「レ○プか、俺には興味がない範囲だな」

「それは残念だ。実に良いものだよ、女性が泣き叫びながら性行為を

するのは非常に興奮する」

「ふうん、そうかい。それは俺も分からなくはないが俺の場合は合意の上で俺が攻めに回るね」

「この犯してる感が良いんじゃないか」

ああ、わかった。

こいつとは性癖が全然違うな。

「あと——その女、死んでるぞ?」

「それもまた私を興奮させるよ」

下種が、死体をレ○プするなんて狂ってるにも程があるぜ。

「そうかいそうかい。まあ人の性癖にとやかく言う気はないし? どうでも良いが、その拘束されてる娘って実は俺の知り合いなんだよね?」

「ほう、なるほどなるほど……では、力づくで奪ってみるかね?」

ドゴンツ!

上空から人影が現れ、地面を陥没させて着地した。

「……………まるでキメラだな」

一応、人間の形はしているが体全体を肥大し過ぎた筋肉で包まれており、顔も人だかなんだか分からないほどにグチャグチャだ。

まるで巨大なトカゲのような尻尾が生えており、爪が鋭く岩をも裂けそうだ。

「見たところただの人間のようだが、よくぞ正体を見破ったね。これは人間をベースに冥界や天界を問わず様々な生き物を合成させたキメラなのだ!!」

恍惚とした表情で語る白衣を着た男

どうやら思った以上に外道な野郎だな

「さあ、攻撃しろ!」

「■■■■■■■■■■!!」

俺は咄嗟に上半身を逸らす、するとギリギリのところをキメラの爪が通った。

距離を取り、冷静に敵を見据える。

俺の頬には三本の細い傷跡が出来て、血がタラリと流れ落ちる。

「ほう、人間の分際でよくも避けられたものだね！」

ゲラゲラと耳障りな笑い声をあげる白衣の男

その間もキメラは俺との距離を詰めてきて、攻撃してくる。

流石はキメラ、合成生物と言うだけあって威力も速さも尋常じゃない。
いい。

「この子は私の最高傑作であつてね、現在の赤龍帝や白龍皇よりも遥かに強い——まあ、覇龍を使われたら流石に敵わないだろうがね」

なんとなく凄いつてのは分かったが、赤龍帝やら白龍皇やら覇龍やら意味が分からない単語並べやがって、もう少しわかりやすく言ってくれ!!

「■■■■■■■■!!」

「らああああああああ!!」

キメラの蹴りに合わせて俺も蹴りを放つ。

お互いの蹴りが交差した部分を中心に軽い衝撃波が出来る。

「■■■■■■■■■■!?!」

威力で押し負けたキメラが数歩後退する

「ほう！ この子と同等かそれ以上の蹴りとは恐れ入るじゃないか!!」

今すぐにもあの白衣の男を殺してやりたいがキメラのせいで辿り着けない。

それに——

「■■■■■■■■■■」

「ちくしょう、なんでそんな悲しそうな目なんだよ」

まるで助けを求めるような悲しい瞳

拳から伝わるのは救いを求める思い

「■■■■■■■■」

低く唸るようなキメラの鳴き声

なるほどな、なんとなくだけど言いたいことは理解した

「安心しな、お前はちゃんと今すぐに壊してやるよ」

心を限りなく無に近づける

東雲雄也だな、しつかりと覚えた

「ぎいーに、おでをごろじでぐれでありがどう」

そして生き絶えるキメラ——いや、東雲雄也

死に絶えてしまった東雲雄也は塵となる、同様に白衣を着た男も塵となった

「あばよ、出来ればお前が人間である内に出会いたかったぜ」

それから一時間後、俺は東雲雄也の言う通り街外れにある廃工場までやってきた。

そしてその入口の前には屈強な黒服の男が立っていた

「なんだ貴様は？」

む、やはり通せんぼを食らったか

ならば試しに先程渡された羽を見せてみる

「失礼いたしました、どうぞこちらをお付けの上にご入場ください」

渡されたのは仮面舞踏会とかでよく見かけるような仮面

「よろしければ衣装の方と傷薬の方もご用意しております」

「助かるよ」

……キナ臭そうになって来やがった

廃工場の中にある魔方陣で、なにやらデカイ屋敷の前に転移した

中に入り、用意されたタキシードと仮面を付けて俺は案内人が言う

“会場”へと向かう

会場内には正面にオペラでもするのかと言うぐらいデカイ舞台があつて、その前に高級そうな椅子が何台もあつた

既に満員近い人が入っており、ヒソヒソと話し声が聞こえる

内容は全部『今日の商品は』とか『絶対に落としてみせる』とか

そんなのばかりだ

なるほど、オークションでもやるらしいな

「おい、貴様」

俺が椅子に座ると隣の奴が小さい声で話しかけてきた

「なぜ貴様がここにいる？」

「誰だよお前？」

「つと、すまん」

少しだけ仮面をずらして素顔を晒す男

「っ!? ライザーじゃねえか」

大きな声を出しそうになったがなんとか抑える

「久しぶりだな」

「おう、久しぶり。で、なんでお前がいるんだよ?」

「それはこちらの台詞だ。俺は来たがらない父の代わりに強制的に参加だ」

「…………このオークションって冥界にも関係してるのか?」

「うむ、冥界だけでなく人間界や天界も関わっている」

天界か、まだ行ったことはないが天使とかがいるのか?

「ここではなにを出品するんだ?」

東雲雄也はここになにかの鍵を握るものがあると言っていた

まさかだとは思いますが先程のキメラのように実験動物や奴隷にさせるための人をオークションに出しているのか?

「安心しろ、人身売買などしているならフェニックス家が全力で潰している」

「ならなにを出してるんだ?」

東雲雄也が言っていた鍵とはなんだ?

「――裏物の品さ」

つまりは盗んだ貴重な展示品や表には公式に出せない品々のことか

「フェニックス家たは全体的にコレクションなどの趣味がないからオークション自体に興味がないので今まで参加を断っていたのだが、父上が断るのを面倒くさがり俺の社会復帰と称して参加させてきたのだ」

そういやこいつ、引きこもっていた上に家出したんだもんな

しかし、訳あり商品か

人身売買でないのなら出品される物が少しだけ楽しみだ

そう考えていると突然頭に

『ワタシヲミツケテ』

そんな声が聞こえてきた

なんだよ一体

『ワタシヲミツケテ』

……聞く耳なしか

しかし、この感じはアイツを助けた時の感覚に似てるな
アイツを助けたら厄介事に巻き込まれたが……なんだかんだで楽しかったし充実してたな

まあ、そんなことは良いさ、俺はかくれんぼは好きだぜ

「ライザー」

「なんだ？」

「少し話を聞かしてくれ、面白くなりそうだ」

俺達はオークションが始まる前に会場を出て正面ロビーに出る

「で、話とはなんだ？」

「まずはここがどこに位置する場所か知っているか？」

「人間界の日本海域にある地図に乗っていない小島だ」

「地図に乗っていない？」

「この島は昔から裏を知っている人間と悪魔達の高級リゾート地として使われていてな、地図に乗せて万が一の事が起きては洒落にならん」

なるほど、人間がこの島を開発されに来てしまっても面倒なだけか
「ではこの島から脱出は可能か？」

「物理的には難しいだろう、超高度な結界で島全体を囲んでいる」

「ならば魔方阵での転移が一番現実的か」

俺が知る魔方阵は通ってきた一つだけ

他にも魔方阵がある可能性はあるが今は探す時間はないか

「助かった情報は十分だ」

さて、はやく行きますか

「待て、なにをする気だ旅人」

なにしてそりゃあ決まってるんだろ

「隠れんぼ」

「はあ？」

「ふふふ、まあまた会おうぜ」

いつちよ覚悟決めなきやならんようだ

俺はライザーに背を向けて歩き出すと同時に会場ではオークションが始まる

これで会場以外の警備は多少手薄になるはずだ

宝物室を探していると銃器を持った黒服の男が一人で一服していた

一気に男に接近し背後をとって男の腰のホルスターに入っていたナイフを奪い首筋に押しつける

「動くな、声を出すな、少しでも不自然な動きをしたら殺す。俺の質問だけに答えろ」

「わ、わかった」

「この島に転移魔方陣はいくつある？」

「み、三つだ。天界と冥界と人間界の日本本州に繋がっている」

冥界や天界に転移しても仕方がないし、やはり最初に通ってきたあそこだけか

「宝物室はどこだ？」

「最上階の部屋だ」

地図を見た限りでは繋がっている二室だけのはずだ、奥の方の部屋が宝物室と考えるのが当然だろう

首筋をナイフの柄で叩いて黒服の男を気絶させて物陰に隠す

一気に階段を駆け上がり最上階

最上階は特殊な造りで階段を上がると一本道だ

「…………マズいな」

扉の前には銃器を持った二人と黒髪の女

「なんで『黒歌』が居るんだよ」

「はあ、暇ね」

私は部屋の外の警備を男達に任せて中で一人で休憩する

なんとなくこのオークションの警備のバイトを受けたけど、全然面白くない

思えば最近、面白いことが少ないわね

なんていうか張り合いがないというか……
ヴァーリーの仲間になって多少はマシになったけども、なんか違うのよね

思えばあの頃が楽しくて充実しすぎたのよ
毎日が必死であの人の側に居れた

半年以上経った今でも毎日の如く夢に出る

私はソファに横になってクッションを抱きしめる

「また会いたいよお、 “旅人”」

一緒にご飯を食べて、一緒に寝て、一緒に旅がしたいよ。

でもそれはもう不可能な話

だって旅人は私の目の前で突然現れた次元の狭間に吸い込まれたんだから。

あそこに普通の人間が吸い込まれて助かる確率は奇跡にも等しい。

「グスツ、まだまだ旅がしたいよ」

また眠ろう、そうすればまた旅人に会えるから。

そう思っていたら廊下の方からドサリというなにかが崩れ落ちた音がした。

ついでに一瞬だが闘気も感じた。

「……敵襲か」

せつかく旅人と会えると思っていたのに邪魔をするだなんて……
殺してやる

臨戦態勢になり部屋で待ち構える。

敵の狙いは宝物室のものだろうし、この部屋を通っていかねば絶対に通れないはず。

ギギギ、と音を上げながらゆっくりと扉が開いていく。

面倒臭いわ、扉ごと壊しちゃいませう。

魔力弾を放とうとしたら扉越しに声があった

「ちよ、待ってくれ！ こちらは無闇に戦闘する気はないってば!!」

ピタリと私の動きが止まる

え、この声ってもしかして——

「……旅人？」

「……違います」

恐る恐る私は扉に近づいて開けてみると

「……………」

「……………」

そこには冷や汗をダラダラと流した旅人が居た

「……………ふえ」

本物の、本物の旅人がここに居る。

「ふえええん、寂しかったよ旅人お〜」

そう思うと自然と涙が溢れてきてしまい、旅人の胸に飛び込んだ。

「落ち着いたか？」

「……………うん」

俺にプリンセスホールドされて丸まっている黒歌

生存を報告していなかったことに罪悪感もあつてどう接したら良
いか分からなかったが泣きつかれたことでなんかそんなことどう
も良くなった。

「ごめんな、今まで心配させて」

「本当よ、寂しかったんだから」

ギョツと俺の服を掴んでくる黒歌

「久しぶりの旅人の匂いだ」

なんか前よりも可愛くなつたな、コイツ

「久しぶりの再会だけど、ごめんな。俺、やることがあるんだ」

「……………(ホロリ)」

泣かないでくれ！ 俺の心に罪悪感が半端なく来るから!!

「グスツ、なに用事って?」

おお、堪えてくれたか、流石は黒歌

「隠れんぼだよ、どうやらその部屋にいるらしくてな」

黒歌を降ろしてここで待機させ、俺は宝物室に入る。

中には様々な品が保管されており、どれもこれも貴重な物なのだろ
う。

その中で、俺は一つのトランクに注目した。
これが今回の目玉商品なのか知らないが、これだけ他と扱いが違う気がする。

試しに触れてみると

『ワタシヲミツケテ』

どうやらこれで間違いなさそうだ。

だが開ける前にやる必要がある。

「黒歌、おいで」

「んにゃ？」

呼ばれるがままにやってくる黒歌

「どうしたのかにゃ、旅うだんぐッ！」

やってきた黒歌の唇を無理やり奪う。

「ちゅ…ちゅ…ぺろ」

「ちゅ…れろ…ちゅ」

舌と舌が触れ合い、俺は黒歌を強く抱きしめる。

「ぺろ…れろ…ぷはっ」

トロンとした表情で俺を覗き込んでくる黒歌

「はあ、はあ、旅人」

俺を求めてくる黒歌はとてもそそのめるのだが

「すまない、今日はこれで許してくれ、この続きは今度な」

「えっ？」

首筋に俺の手刀を当てて気絶させる。

倒れるところを俺が受け止めて、ソファに寝かしてやる。

そろそろオークションの前半戦も終わりに近いのだ、後半戦の為に

品を取りに来る前に脱出しなければ。

急いでトランクを開けて、中身を確認する。

「おいおい、マジかよ」

その中には翡翠色の髪をした全裸の5歳ぐらいの子が入っていた。

息を確かめるとまだちゃんと生きている。

とにかく、こいつが俺を呼んでいたのなら即刻連れて帰ろう

タキシードを脱いで少女の体を包んでやり抱き上げる。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリ!!

それと同時に警報のベルが鳴った。

どうやら見つかったらしいな。

廊下の向こう側にある階段からいくつもの足音が聞こえる。

「……………賭けに出るか」

ここは五階、そして眼下に見えるのは日本への転移魔法陣

正確にあの魔方陣に飛び降りれば怪我はしないか？

基本的に耐久力は普通の人間なんだし…………でもこの前、俺ってば学

校の屋上から飛び下りてたし大丈夫か？

この子を戦いに巻き込むわけにはいかないしな

「じゃあな、黒歌。また会おうぜ」

そして俺は魔方陣に吸い込まれるように飛び降りて、脱出するの
だった。

新しい家族

なんとか脱出に成功し、俺は家へと帰って来た。

俺以外の家族は全員帰ってきているらしく、寝静まっている。リビングにこの子と一緒にいき、目覚めるのを待つ。

「ライザーめ、なにが人身売買はしてないだ」

ばつちり人間売ってるじゃないか

だがライザーに限ってそんな類いの嘘をつくはずがないならばライザーすらも知らなかったのか？

その可能性は高いだろう

あのオークションが続けられた理由の一つは人身売買をしなかったからだろうしな

「ん……ふあ」

「お、目覚めたか」

翡翠色の髪をした少女が目を覚ました

「……………」

寝ぼけた眼で辺りをキョロキョロと見回す謎の少女

「……………誰？」

まずは場所じゃなくて俺が誰かと尋ねるとは、やるな。

「俺の名は兵藤旅人、世界を自由に駆け巡る旅人さ」

「たびうど？」

俺を指さしながら首を傾げる少女

「そ、旅人」

少女の頭を撫でながら笑いかける

気持ち良さそうな顔をする少女

「たびうど、たびうど、たびうど……………」

何回か俺の名前を繰り返し呼ぶ。

「えへへ……………良い名前だね！」

ちくしよう、可愛いなく

「……………なにしてんの兄貴？」

なにかが俺の中で止まった

「あら、誰かしらその子?」

「しかも裸です」

ゆつくりとギコちなくだが後ろを振り向く

そこにはオカルト部の面々と両親が居た

『……………』

よし、現状を整理しよう

タキシードに身を包んだ全裸の幼女

その頭を撫でている俺

『へ……………変態だあああああああああああああああああ!?!』

「違うんだあああああああああああああああ!?!」

世界よ、俺になんの怨みがあるのだ?

みんなへの必死の説得の末になんとか誤解を解いて、俺は再び少女と向き合う。

ちなみに少女の話だが、捨てられていたということにしている。

なぜなら俺の勘がオークションのことは黙っていた方が良いと言っているからだ。

しかし、どうしてあんなところに居たんだ?

まさか間違えて紛れたとは考えにくいし。

「お父さんかお母さんはどこにいるか分かるか?」
「???'」

首を傾げて不思議そうな顔をする少女

「お父さん? お母さん? キーア、そんなの知らないよ」

「キーア、お前の名前はキーアって言うのか」

でも一体、誰があのおークションに――

「……………兄さん」

なんだよゼノヴィア、いま凄く推理中なんだからちよつと待ってくれよ。

「まずはその子の格好、どうにかしないとイケないと思わないかい?」

「……………あつ」

そうだな、その通りだ。

イツセーがちよつと興奮気味になってるから早くどうにかしない

と。

「キーアちゃん、服を着ましようか」

リアスがキーアに近づいて手を伸ばすとキーアはその手を掻い潜って俺に飛びついてくる。

「キーアも旅人の着てる服が良い！」

なにを言いますか。

別に俺は構わないけども、サイズが違いすぎるだろう。

「旅人のと同じが良いの！」

「なら任せなさいキーアちゃん」

お袋、なんか久しぶりな気がするの俺だけか？

「こんなこともあるのかと旅人のお古は取ってあるのよ!!」

流石は母上、先見の眼がありすぎる。

数分後、俺の昔の服を着てキーアは戻ってきた。

白のTシャツに短パン

案外、似合っていることに驚いた。

「むう、旅人と同じじゃない」

「ははは、拗ねんな拗ねんな」

ちよいと乱暴だが頭をグリグリと撫でまくる

「……………(ジー)」

「兄貴の方を凝視してどうしたんだよゼノヴィア、子猫ちゃん？」

「別になんでもない」

「そうです、黙っててください」

イツセーが「子猫ちゃん、まだ俺には兄貴程には懐いてくれてないのね」とか涙を目に溜めてリアスに抱きついていた。

「ところでお袋に親父、「良いよ(わよ)」まだ内容を言っていない」

「どうせキーアちゃんを家族にしたいとかでしょ？」

「僕たちは大賛成さ、アーシアちゃんに続いてキーアちゃんみたいな可愛い娘が出来るなんて夢のようさ」

「それにキーアちゃんは捨てられてたんでしょ？」

「そうそう、そんな子をまた捨てるなんて人を疑うよ」

あんたら気前良すぎだろ

「でだ、一誠は断るはずがないから意見を聞かないが「確かにそうだけでも、せめて聞いてよ！」……キア、お前はどうしたい？」

スルースキルで一誠を無視してキアに問いかける
人生において、道標などありはしない

いつも方向を決めるのも、歩きだすのも最終的に自分だ。

だからこそ俺はキアに自分で道を決めてもらう

「かぞく？」

「知らないのか？」

「うん」

「そっか……『家族』ってのはな、切っても切れない硬い絆で結ばれてる人達のことだ」

そう考えると一誠や両親だけでなくリアスや朱乃、オカルト部部員は全員が『家族』になるな

「うくと、旅人とずっと一緒に居れるの？」

「ずっとじゃないけど、一緒に居られるな」

主に俺の仕事のシフトが無い日は

「なら『家族』になる!!」

笑顔で俺にダイブしてくるキア

おお、懐かれたか、俺？

とにかく、こうしてキアが家族になったのだった。

紫藤イリナ

「えー、旅人行っちゃうの〜」

「ごめんな、キーン」

キーンが家族になり数時間後、俺はバイトの為に一誠たちよりも早い時間に学校に行かなければならなかった。

「午前中で終わるから午後には帰ってくるよ」

「う〜」

涙目になり俺の事を上目使いで見ってくるキーン

やべえ、なにこの可愛い生物

「じゃあ、行ってくるから」

「はやく帰ってきてね〜!!」

俄然やる気出てきた。

「ふあふあふあ、今度会ってみたいの」

「たぶん会ったら、気道さんも思わず可愛がっちゃいますよ」

校内の掃除をしながら俺は気道さんにキーンの自慢を試してみた。

「しかし、体育祭ですか」

「毎年、皆が熱く戦う祭りじゃ。今年も変わらずに熱気に満ち溢れておる」

確かに、ここ最近の駒王学園は熱気に満ち溢れていた。

と言っても俺はまだ一週間ぐらいしかここに居ないが。

「——うずうずしておるの」

「あ、わかります?」

「これでも俺はこうというのが大好きだし、参加してみたくはあるな。

「ふあふあふあ! お主も男子じゃの」

「お恥ずかしい限りです」

「……乱入は止めておくのじゃぞ」

「……はい」

クッ!

「ただこの人は先を読んでいるんだ!!」

「さて、旅人君。ワシは一階をやるから上の階を任せても良いかの?」

二階から四階まで掃除かよ。

でもまあ、気道さんも歳だし、階段を上がるのも辛そうだし良いか。

俺は言われた通り、手始めに四階から掃除して、一階ずつ降りて行く。

三階も終わり、二階を掃除していると声を掛けられた。

「あれ、もしかして旅人さんですか!?!」

この時間、もうすぐ朝のHRで生徒は誰も居ないはず。

しかも聞き覚えのある声、先生方の声じゃないけど誰だ?

「きゃ〜! やっぱり旅人さんだ!!」

職員室から現れたのは栗毛のツインテールの女子

……まさかこいつは

「ほう、どこの美少女かと思ったらイリナじゃないか」

「美少女だなんて、褒めてもなにも出ませんよ／＼」

ははは、照れやがってこいつ。

懐かしいやつにあったもんだ。

「ん? そういやここの制服着てるな」

「そうです、私は今日からこの駒王学園に転入したんです!!」

なぜか胸を張るイリナ

「へえ、なかなか似合ってるぞイリナ」

「へへへえ、そうですか?」

ふむ、昔は男っぽい感じだったがよくもまあここまで女の子らしくなったものだ。

「旅人さんはここの生徒じゃないんですか?」

「おう、俺は中卒だ。今はここで事務員としてバイトしてる」

「ええ〜、じゃあ旅人さんとイチャつけません」

「くくく、なに言ってるやがる」

懐かしいな本当に。

「まあ、俺もここに就職して一週間程度だ。新米同士頑張ろうじゃないか」

いか」

「はい、これからよろしくお願いしますね!!」

握手をする俺とイリナ

うむうむ、実に元気な娘でよろしい。

——だが……な。

手を握った時の感覚、北欧の可愛い姉ちゃん達に酌してもらう店に連れてつてくれたオーデインとかいう爺さんの部下とかいう——
ヴァルキリアだったか?—— 奴らに近い雰囲気を感じた。

あいつらも人間離れた動きしてきたし、まさかイリナも人外じみた動きとかできるのか?

「……………想像したくないな」

俺は秘かに怖がっていたりしたのだった。

生徒会のメンバーにもイリナは挨拶を済ませ、歓迎会でイリナと俺は久しぶりに話をしていた。

話題は兄貴のことだ。

「出来れば同じ生徒同士が良かったわ」

そうなんだなあ、俺もそれが良かったよ。

「でも旅人さんと同じ学校に居られることに変わりはないわ!!」

「イリナは兄貴によく懐いていたからなく」

下手したら俺と遊ぶよりも兄貴に面倒をよく見てもらってたんじゃないか?

だって俺と遊ぶ約束してないのになぜか兄貴と遊んでるし、泊りに来た時だって兄貴と

ずっとベツタリだったし。

兄貴は兄貴でイリナのこと気に入ってるから面倒を見てたし。

「以前は会えなくて、帰ってから十日十晩寝込んだけども、これも主のお導きよ!」

「ただ兄貴と会えなかったのが残念だったんだよ!」

神様が死んだって聞かされた時よりも三日三晩長いつてどんだけだよ!!

「そ、そんなに兄貴に会えなかったのが悲しかったのか?」

「当たり前じゃない!!」

おおつ、すごい迫力だ。

「私は旅人さんの事がすく」

ガシッ

イリナが何かを言いかけたところでゼノヴィアと子猫ちゃんがイリナの肩を掴んだ。

「ちよつとこつちに來てもらえますか?」

「女として」 大事な話があるんだ」

くつ、なんだこの二人から放たれている禍々しいほどの殺気は!

あのアザゼル先生ほどですら冷や汗を滝のように流してるじゃないか!?

「へえ、女として?」

「ああ、女として」だ」

しかしそんな殺気をもものともせず平然としているイリナ

こいつ……出来るぞ!!

ごめんなさい、ぶつちやけ漏らしそうです。

三人はそのまま外に出て行き、この場には静寂だけが残った。

キーア×読書×過保護

「はあ……」

あのオークションから数日、私はヴァーリー達の下に戻ってから溜め息が増えた

うう、旅人

幾らなんでもアレは反則よ

それに久しぶりに会ったっていうのに気絶させることないじゃない

い
でもそんなことよりも――

「――旅人が生きてたあ」

その事実が私の中で満ちる

てつきり死んだと思ってたから自暴自棄になってヴァーリーや赤龍帝に子作りとか求め

ちやっただけど旅人がいるならどうでも良いにやん。

今度会ったらなにしてもらおうかな？

「旅人、今日は仕事に行かないの？」

「おう、今日は一日休みだから一緒だぞ」

「やったああああ!!」

そんな喜ばれちまうとこっちもなんだか嬉しいぜ

「あう、羨ましいですお兄ちゃんは」

「まったくね、キーアにも一番懐かれてるし」

「ふふふ、こうして見るとまるで仲が良い、歳の離れた兄妹ですわ」

「でも私としてはキーアの方が羨ましいです」

「激しく同意だな」

女性陣はこんな感じ

「義兄さん……子供にモテるんだね」

「凄く懐かれますね」

「きつと精神年齢が同じぐら……ゴホン、兄貴は純粹だからじゃないか？」

これが男性陣の反応

アザゼルはあれでも一応は教師なので先に家を出てる
てか、あいつは家に来てない。

「ほら、お前ら。早く行かないと遅刻するぞ？」

「そうね……みんな行きましょう」

リアスの号令の下、それぞれが挨拶をして外に出ていく

「行つてらっしゃーい！」

みんなを見送るキーア

その姿にリアス達全員が頬を緩ませる

まだ家に来て一週間が経ってないのに好かれてるな、とても良いことだ。

さて、みんなが行ったことだし俺はキーアに勉強させるかな。

あつ、勉強って言っても学校とかで習う勉強じゃなくて遊びとか生活面についての方の勉強ね。

「旅人、本読もう！」

キーアは本が好きみたいで、よく俺と一緒に図書館とかから本を借りては読んでいる。

本が好きだと発覚した理由はつい二日目まで遡る。

その日は珍しく、キーアと俺とリアスだけしか家に居なかった。

しかも俺達は家の中で一番キーアを可愛がっている二人で、その日もキーアに癒されていた。

「ねえ、旅人」

「なんだよ？」

「キーアってば可愛いわね」

「可愛いな」

「お持ち帰りしたいわ」

「ここは俺達の家だけでもな、気持ちわかるぜ」

俺達はこっそりと二人でリビングの入り口から隠れて中を覗いていた。

「ん〜、取れない〜」

冷蔵庫の上の方にあるプリンを取ろうと背伸びをしているのだが背が届かず、取れないキア

その後ろ姿に俺達は『萌え』を感じていた。

「あ、そうだ！」

なにかに気付いたようで、キアは椅子を持ってきてその上に乗った。

「取れたあ!!」

「おお〜！（ボソツ）」

やっぱり賢いな、キアは

プリンを食べて幸せそうにするキアも見れたし、そろそろ俺達も出て行くかな。

「あ、旅人にリアス、おはよう」

「おはよう、キア」

「美味しそうなもの食べてるわね」

「うん、とってもおいしいよ!!」

にこっ、と笑うキア

「くっ!!」

俺とリアスが仰け反る

駄目だ、破壊力があり過ぎる!!

「もう駄目、我慢できない!!」

リアスが我慢できずにキアに抱きつく

あの豊満な胸に挟まれたキアは苦しそうにジタバタしている。

「これこれリアスさんや、気持ちは分かるがキアが死にかけてるから」

ジタバタする力が弱くなってきてグツタリし始めてるし

「ぐ、ぐめんなきい」

まったく羨ましいなキーンめ

「ねえねえ、旅人」

解放されたキーンが俺に近づいてきて話し掛けてきた

「どうした？」

「んとね、机の上にある本に出てきたんだけど本当に妖精さんっているのかな？」

「おお、なんとという輝いた目をしているんだ

「居るぞ、きつと可愛い奴らなんだろうな」

「ええ、そうよ」

なぜかは知らんがリアスの言葉に凄い説得力がある。

「そっかあ、でも本に出てきた妖精さんは可愛いって感じじゃなかったよ？」

それはまた珍しい

「キーンは本が読めるんだな」

「うん、好きだよ……ふあ〜」

おっと、どうやらお腹いっぱいになって眠くなったようだな。

「ほら、キーン」

俺はキーンを抱き上げるとすぐに俺の腕の中で丸まって寝てしまった。

しかし、机の上にある本？

何の本だろうか？

「ねえ、旅人……これって」

俺がキーンを膝枕するためにソファに座るとリアスが横に座ってきて本を見せてきた。

「……おいおい、マジかよ？」

リアスが見せてきた本、それはシェークスピアの『真夏の夜の夢』だった

「妖精って『妖精の女王』のことかよ、それなら確かに可愛いって印象は受けないな

リアスも苦笑いしている、こんな難しい本を読んだのかよキーンは「下手したら一誠よりも頭が良いんじゃないか？」

「少なくとも内容とかは理解しているみたいだから、そういう点では一誠よりも上よね」

この眠っているお姫様は俺達の予想よりも賢いようだ。
ってなことがありまして、現在

難しすぎるのは俺が参ってしまったので軽めの物を読んであげた

その後に、キーアを昼寝させて起きたらテレビを見るという平和な日だった。

「ただいま〜」

「お帰りなさい〜」

帰って来たオカルト部連中

木場とギヤスパーは帰り道の途中で家に帰ったらしく居ない。

アザゼルは残業だそうさ。

「今日は部活動は良いのか？」

「今日は休みなんだよ」

てつきり今日もイツセーが学校でハーレムを楽しんでくるのかと思っただけ違ったみたいだ。

そんなこんなな一日だった。

そしてこれが、全てが始まる前の最後の日であったのだ。